II．遺跡調査の概要

調査の理由と工程

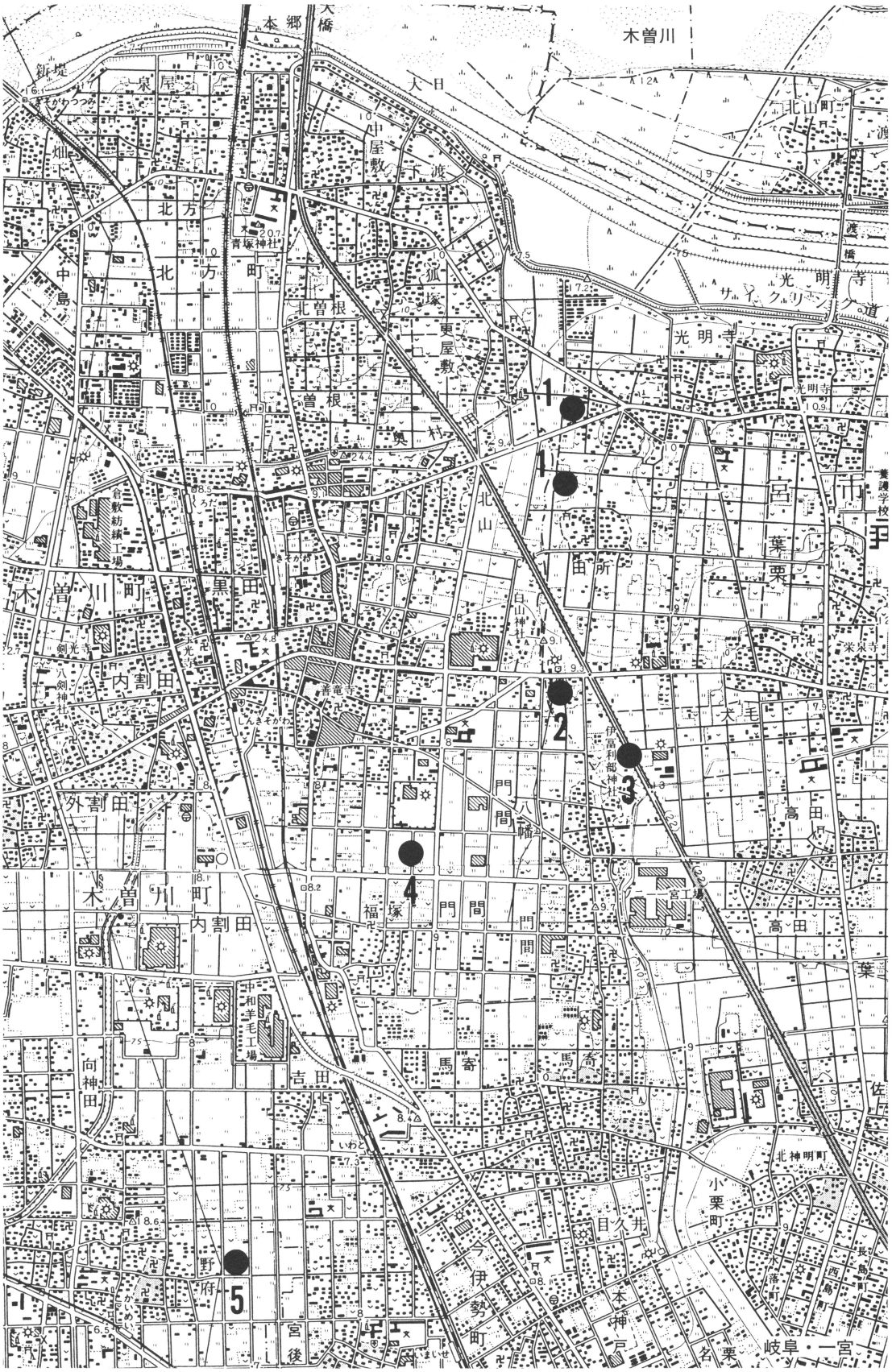
1．発掘調査

調査委託者	調査の理由	遺跡名		面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
日本道路公団 愛知県土木部 (道路建設課)	東海北陸自動車道建設	大毛池田遺跡	A	3,500	94．4～94．12	杉浦・伊藤・樋上
			B	200	94．7～94．8	杉浦・伊藤・樋上
			C	700	94．4～94．6	杉浦・黒田・小川・北條
			D	1,100	94．6～94．8	杉浦・黒田・小川・北條
			E	1,000	94．6～94．9	大竹・赤塚・小泉
			F	1,800	94．4～94．9	大竹・赤塚・小泉
			G	2,200	94．9～95．1	大竹・今西・飴谷・鬼頭
			H	300	95．1～95．2	杉浦・伊藤・樋上
			I	1,400	94．8～94．12	杉浦・伊藤・樋上
			J	2,100	94．8～94．11	杉浦・黒田・小川・北條
			K	1,600	94．12～95．3	大竹・今西・飴谷・鬼頭
			L	2,400	94．12～95．3	杉浦・伊藤・樋上
			M	1,000	94．11～95．1	杉浦・黒田・小川・北條
		(20,700㎡)	N	1,400	95．1～95．3	杉浦・黒田・小川・北條
		大毛沖遺跡	A	2,800	94．4～94．7	大竹・今西・飴谷・鬼頭
			B	1,800	94．4～94．6	前田・酒井・西原
			C	3,600	94．4～94．10	高橋・小池・牧・永井
			D	2,000	94．10～94．12	高橋・小池・牧・永井
			E	1,400	94．7～94．9	大竹・今西・飴谷・鬼頭
			F	1,800	94．4～94．6	高橋・小澤・増澤
			G	1,300	94．12～95．1	高橋・小池・牧・永井
			H	2,500	94．6～94．11	前田・酒井・西原
		(20,100㎡)	I	2,900	94．12～95．3	高橋・小澤・増澤
		門間沼遺跡	A	1,900	94．4～94．6	前田・石黒・栗林・秋田
			B	1,900	94．6～94．12	前田・石黒・栗林・秋田
			C	3,700	95．1～95．3	前田・石黒・栗林・秋田
		(10,000㎡)	D	2,500	94．11～95．3	前田・酒井・西原
		田所遺跡	A	800	94．6～94．8	高橋・小澤・増澤
			B	3,200	94．8～94．11	高橋・小澤・増澤
		(4,500㎡)	C	500	94．11	高橋・小澤・増澤
		西上免遺跡	A	2,700	94．9～94．12	大竹・赤塚・小泉
		(4,700㎡)	B	2,000	94．12～95．3	大竹・赤塚・小泉
愛知県土木部 (河川課)	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	1,200	94．10～95．2	福岡・神谷・蟹江
		(1,500㎡)	B	300	95．2～95．3	福岡・神谷・蟹江
愛知県土木部 (下水道課)	下水道浄化 センター建設	一色青海遺跡	A	736	94．4～94．5	福岡・池本
			B	1,080	94．4～94．5	福岡・池本
			C	1,486	94．6～94．8	福岡・池本
			D	214	94．6～94．8	福岡・池本
			E	192	94．12	水谷・池本
		(3,900㎡)	F	192	94．12	水谷・池本

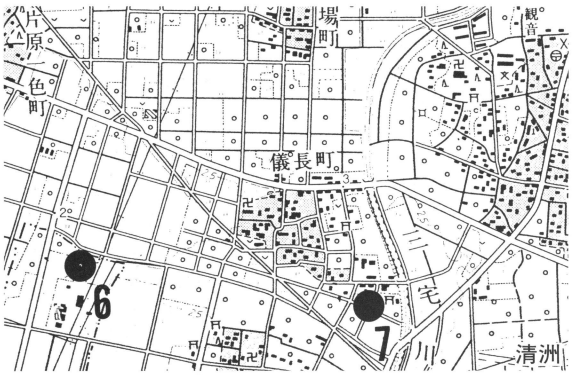
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
愛知県土木部（道路建設課）	馬飼井堀線建設	正楽寺跡・儀長城跡・儀長寺通遺跡 (5,170㎡)	A	732	94. 12～95. 1	水谷・池本
			B	1,314	94. 9～94. 10	水谷・池本
			C	1,492	94. 11～94. 12	水谷・池本
			D	1,632	95. 1～95. 3	水谷・池本
愛知県土木部（道路建設課）	西尾幡豆線建設	鳥羽城跡 (3,180㎡)		3,180	94. 4～94. 10	福岡・神谷・宮腰・水谷

2．整理報告書

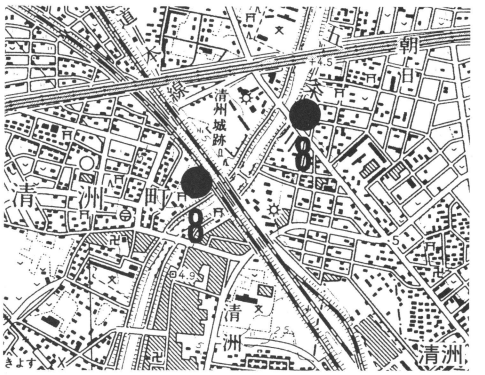
調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省（名四国道）	国道23号	牛ノ松遺跡	13,000	平成4年度
	岡崎バイパス建設	広坪遺跡（整理）	4,200	平成5年度
愛知県総務部（財務課）	三の丸共同施設建設（仮称）	名古屋城三の丸遺跡	3,404	平成5年度
愛知県総務部（地方課）	東三河総合庁舎建設	吉田城遺跡	5,300	平成4・5年度
愛知県土木部（道路建設課）	堀切中山線建設	川地遺跡	840	平成5年度
	橋梁改築	島田陣屋遺跡	2,682	平成4・5年度
	清洲新川線改良	清洲城下町遺跡(整理)	500	平成5年度
	国道155号線建設	烏帽子遺跡（整理）	2,040	平成5年度
愛知県土木部（河川課）	五条川改修	清洲城下町遺跡	29,750	昭和61～平成5年度
		清洲城下町遺跡(整理)	540	平成4・5年度
愛知県企業庁	内陸用地造成	刀池古窯跡群	1,800	平成5年度



1．田所遺跡　2．大毛池田遺跡　3 大毛沖遺跡　4．門間沼遺跡　5．西上免遺跡

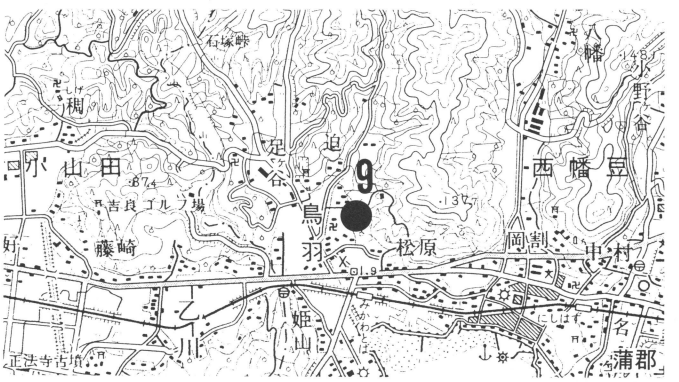


6．一色青海遺跡　　7．正楽寺・儀長寺遺跡



8．清洲城下町遺跡

遺跡の位置



9．鳥羽城跡



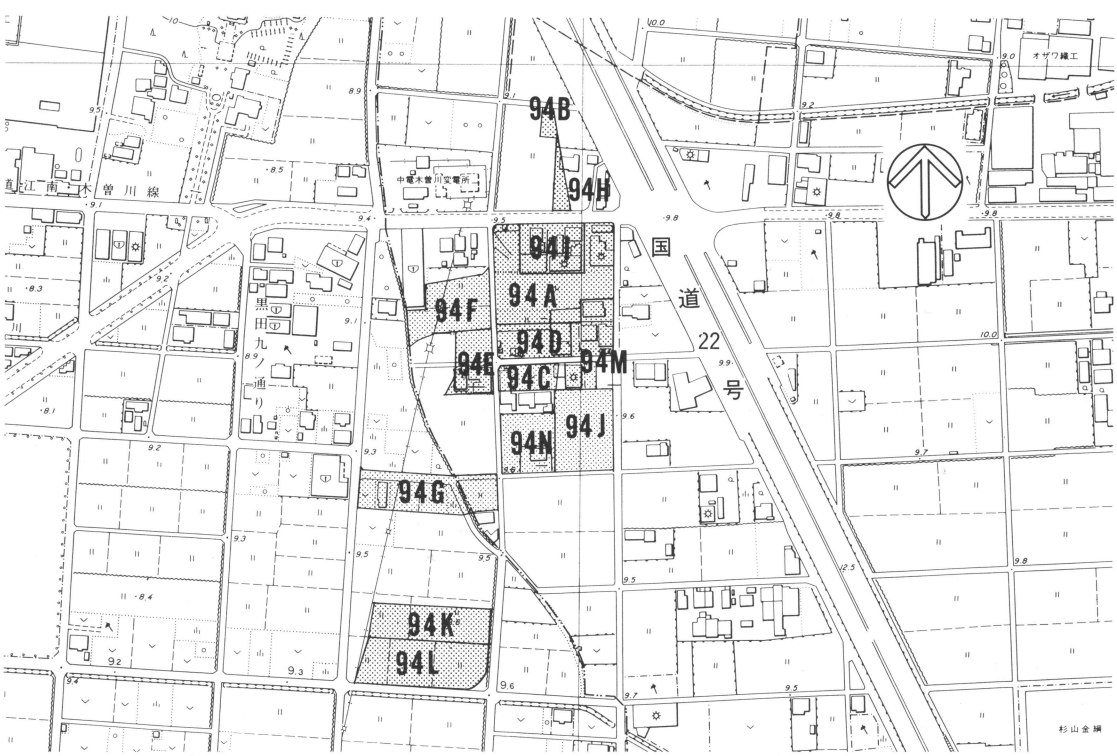
大 毛 池 田 遺 跡

調査の経過　大毛池田遺跡は、一宮市北西部の大字大毛字池田地区を中心にして葉栗郡木曽川町東部に広がる範囲に所在している。本遺跡は、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に展開しており、古墳時代から戦国期におよぶ複合遺跡である。

調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度に引き続き20,700㎡を平成６年４月より同７年３月にかけて実施した。

調査の概要　調査は、Ａ～Ｎの14箇所の調査区を設定して実施した。遺跡の基本層序は、第１層として耕作土、２層：暗灰褐色シルト、３層：暗灰黄色シルト、４層：灰褐色粘土、５層：暗紫褐色粘土、６層：灰オリーブ粘土、７層：灰褐色中粒砂の順に概ね分けることができる。検出された遺構と遺物は、古墳時代（Ａ期）、奈良・平安時代（Ｂ期）、鎌倉時代（Ｃ期）、戦国期（Ｄ期）の４時期に大きく区分できる。また遺構検出は、Ｂ～Ｄ期は２層上位で、Ａ期は４層または５層上位でおこなった。

今年度の調査成果としては、昨年度に続き、現状で県内最古にあたる古墳時代前期の水田遺構を広範囲にわたって確認したこと、Ｂ期にあたる奈良時代前期の「美濃」刻印須恵器をはじめとする特殊な遺物の出土、さらに平安時代の竪穴住居群等の検出があげられる。特筆すべき点としては、Ｄ期にあたる一辺１町程度の区画溝に囲まれた国人領主クラスの屋敷地を検出したことがあげられる。　（杉浦　茂）



第１図　調査区位置図（1/5000）

A期の遺構遺物　昨年度の調査でみつかった古墳時代前期に属する水田遺構について、本年度調査では南北230m、東西150mという規模の水田域の広がりが確認されたほか、新たに水田の構造に関する多くの知見を得ることができた。その結果、既に報告したものについても修正を必要とする箇所がでてきたため、併せて報告する。

水田が検出されたのはE区以外のすべての調査区であり、検出面は第4層淡灰色粘土層上位(AbI・F・G)あるいは第5層暗褐色～黒色粘土層上位(Aa・C・D・J)である。

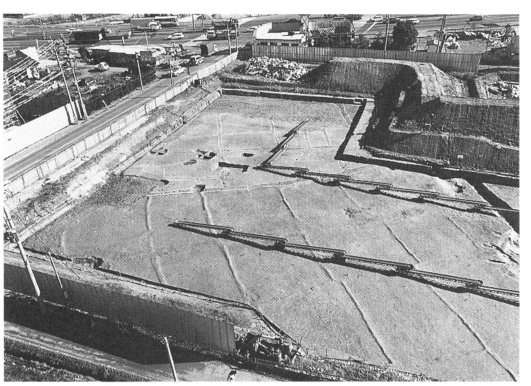
この上位水田と下位水田の検出面の違い、区画の規模・方向性などを検討した結果、第4層—水田耕作土層、第5層—水田基盤層という水田の構造が明らかになってきた。したがって、第5層で確認される畦畔は、昨年度調査部分も含めて4層上位水田以前の段階に作られた水田区画、すなわち開田時により近い時期の水田の痕跡と考えられる。また、基幹の水路の一部と思われるJ区SD17わきの高まりから出土した古式土師器片（S字甕C，D類、宇田甕、布留甕1点など）から、廻間Ⅲ期後半～松河戸Ⅱ期の時期にかけて断続的に水田耕作が続けられたと思われる。

今回の検討の契機となった第4層上位水田（AbI区）は、ほぼ全面を洪水性の堆積物で覆われており、埋没直前の水田景観を伝える多くの資料を提供した。まず、砂層を取り除くと厚さ10cm前後の灰色粘土（耕作土）層にあたり、同じ土壌による畦畔の高まりが確認できた。上端幅30cm、高さ20cmの大畦畔が大区画を構成し、これを幅20cm、高さ5cm程度の小畔が細分して小区画を形成する。水口も随所にあり、特に南北の大畦畔に設けられた2カ所の水口では西側の区画に水を落とすような構造が認められた。上位水田での注目すべき成果としては、小区画の配分や給配水の単位となる「大区画」が新たに確認されたこと、耕作土上面で足跡のほか稲株跡とみられる小ピットが多数確認されたことなどがあげられる。

古墳時代の遺物を含む遺構として溝3条（SD17・18・19）を検出した。これらの溝はほぼ並行してして延び、SD19はU字状の断面を呈し、遺物は6世紀の須恵器蓋杯数点(H－44）を出土した。

なお水田調査に関しては、矢田勝氏（静岡県埋蔵文化財調査研究所）にも多くの御助言をいただいている。

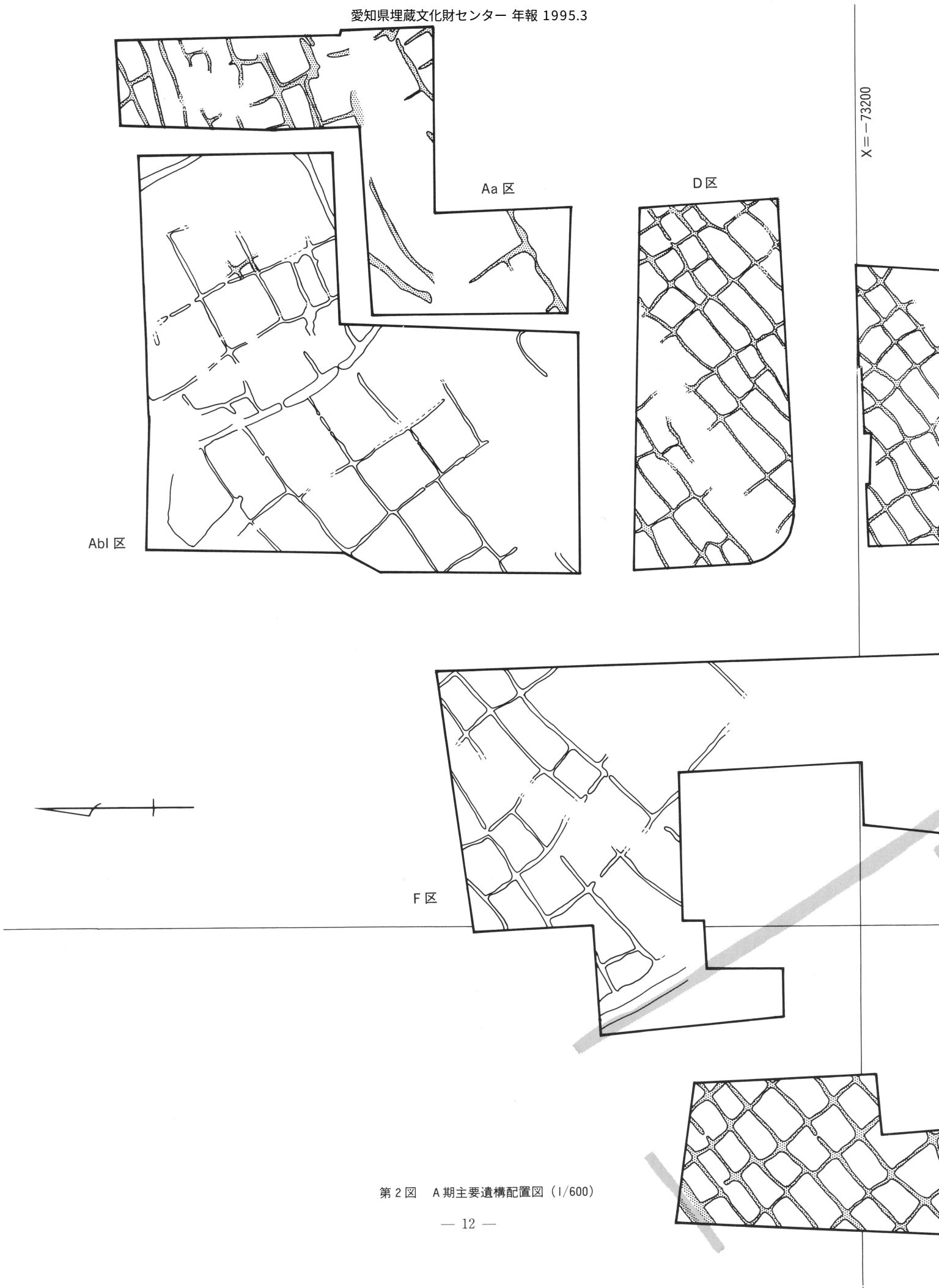
（北條真木）



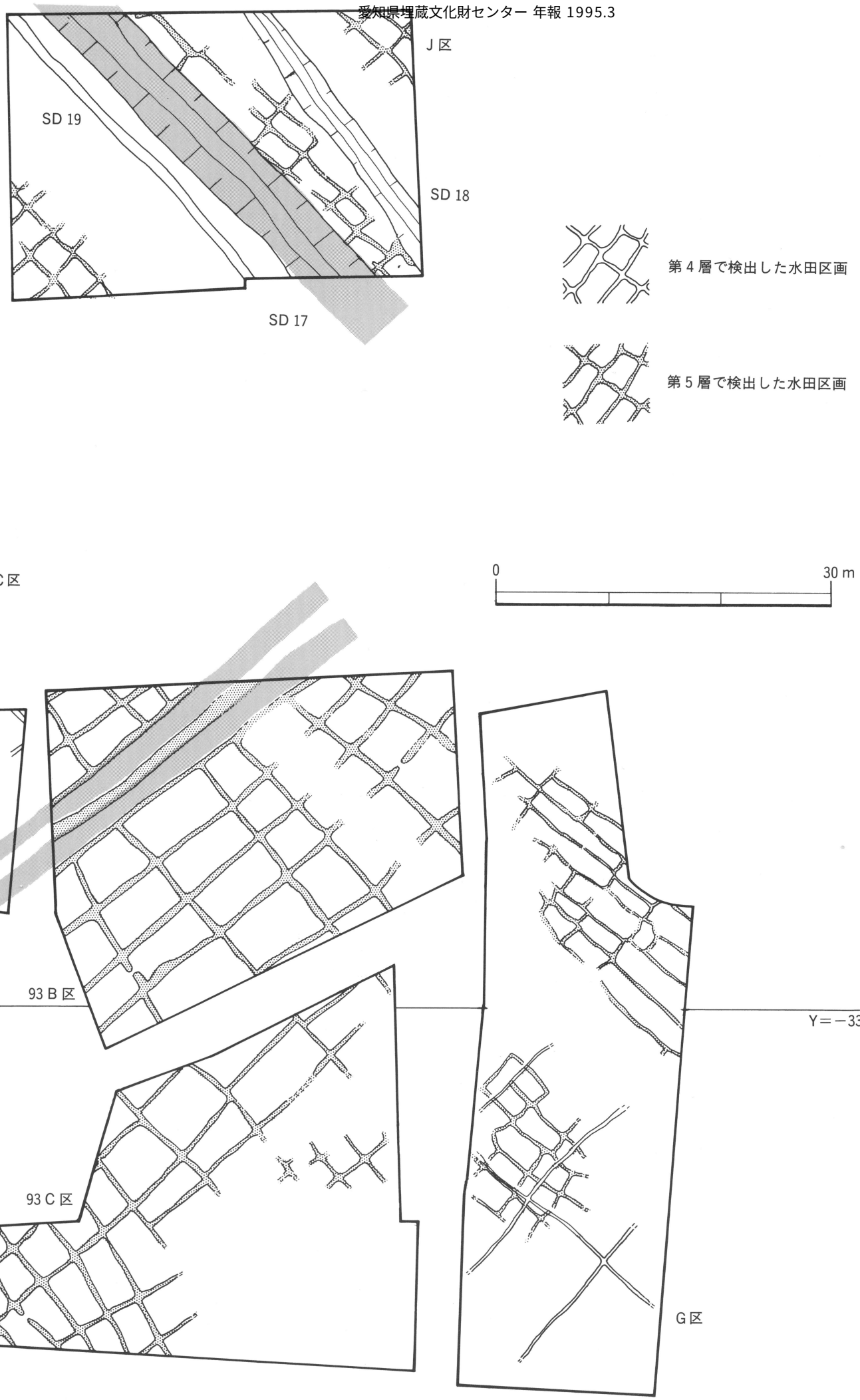
AbI区　水田全景



足跡・稲株痕（？）検出状況



第 2 図　A 期主要遺構配置図（1/600）

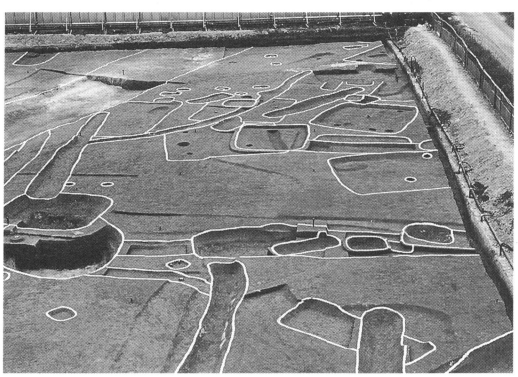

J区
SD 19
SD 18
SD 17
第4層で検出した水田区画
第5層で検出した水田区画
C区
0
30 m
93 B 区
93 C 区
Y＝－33600
G区

Ｂ期の遺構遺物　幾つかの調査区を横切る形で、北東－南西方向へ続く数条の溝が検出された。この地域の自然地形の影響をうけて形成されたものとみられる。その他の遺構はこれらと相前後する形で展開していた。

検出された遺構やそれに伴う遺物から、この時期は前期（奈良時代以前）と後期（平安時代）の２小期に細区分できそうである。

前期：大溝（Ｍ・Ｃ・Ｇ区）、竪穴住居跡（Ｆ・Ｊ・Ｍ区）、井戸（Ｆ区）、鉄滓が出土した土坑（Ｆ区）などを検出した。竪穴住居跡は全部で17棟あり、１辺４～５ｍ四方である。方位の類似性から主軸をＮ－20°－Ｅとするものと、Ｎ－０°－Ｅとするものの二つに区分できる。それぞれの重複関係から、前者が奈良時代前半、後者が奈良時代後半とみられる。前期の遺物としては、須恵器の蓋・杯・高杯・𤭯・鉢・甕・細頸瓶・円面硯など、土師器の甕、高杯などが出土しており、また、器種もバラエティーに富んでいる。中でも「美濃」刻印を有する須恵器が２点出土したことや畿内産の土師器の杯が出土したことは特筆すべきであろう。

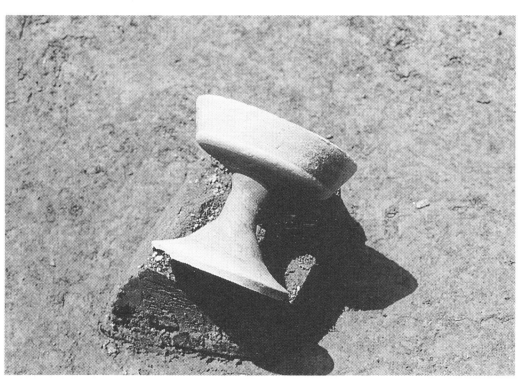
後期：大溝（Ｍ・Ａ・Ｄ・Ｇ区）、竪穴住居跡（Ｆ・Ｍ区）、池（Ｅ区）、土坑（Ａ区）などを検出した。竪穴住居跡は全部で６棟あり、１辺ほぼ５ｍ四方である。主軸の方向はいずれもＮ－12°－Ｗである。池の大きさは、検出できた範囲では、南北の径約30ｍを測る。この池は中世前半には埋積したと見られる。後期の遺物としては、灰釉陶器の椀、緑釉陶器片、土師器の甕などが出土した。前期に比べて土器の器種は少ない。

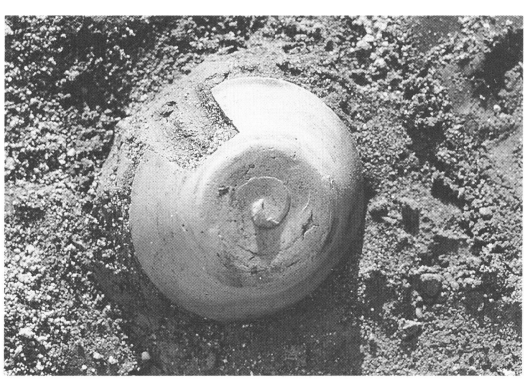


Ｂ期（前期）の竪穴住居

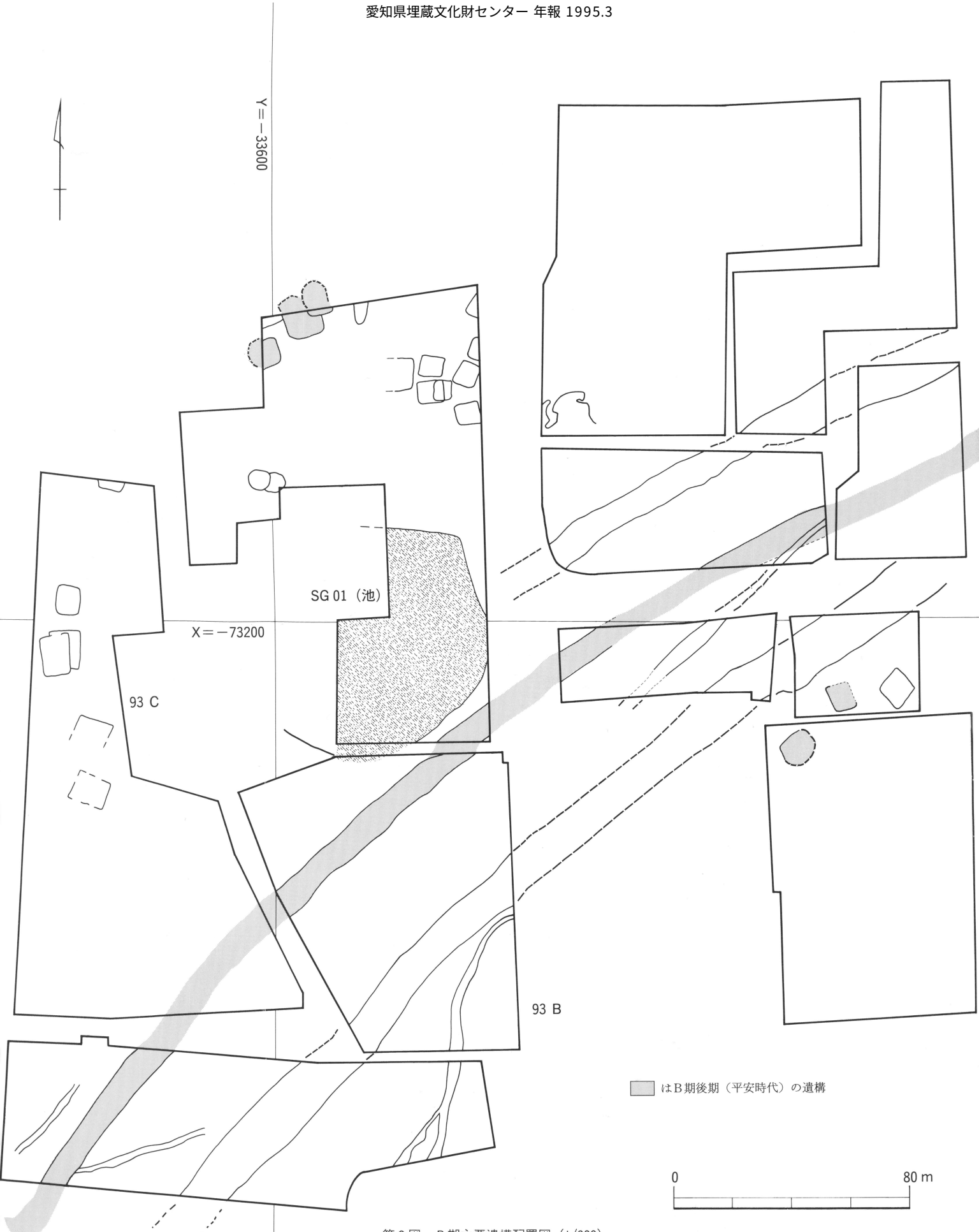


「美濃」刻印を有する杯（Ａ区）





Ｂ期（前期）の出土遺物（左：Ａ区、右Ｇ区）



第３図　Ｂ期主要遺構配置図（1/800）

B期の前期は、土器の器種の豊富さや出土量の多さに対して、性格が把握できる遺構の数は決して多くない。恐らく平安時代以降に削平をうけたためと思われる。それ故にこの時期の大毛池田の様子を把握することは困難であるかもしれない。そこで今回については遺物の様相からの復元を試みたい。

① 土器の器種構成は、供膳具が主体である。

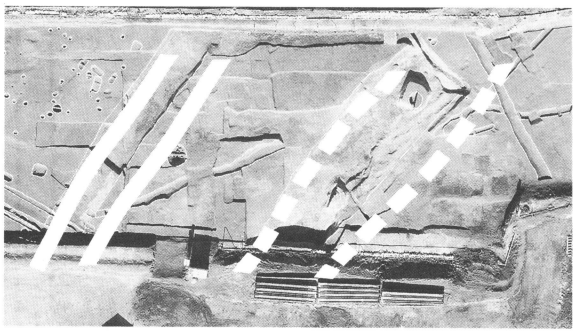
② 官衙と想定される遺跡で出土している「美濃」刻印を有する須恵器や文房具として使用された円面硯が存在する。

③ 94F区で鉄滓が出土していることから、当時この付近で鍛冶を行っていた可能性がある。

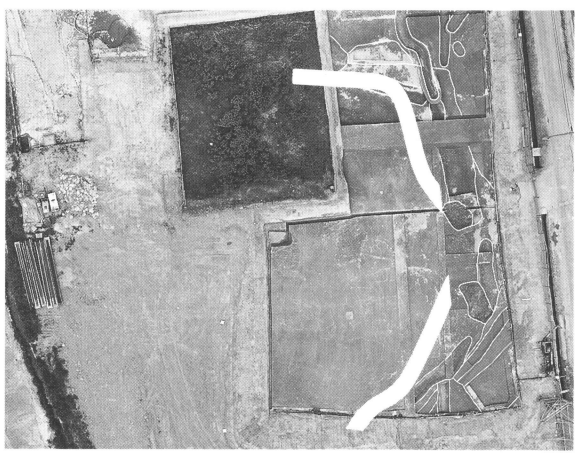
④ 93B区から銅椀蓋片や金属製仏器を模した須恵器の蓋・椀が出土している。

以上の4点から、当該期には官衙もしくは寺院的な施設が存在していたと考えられる。

B期の後期は、前期で出土したような特異な器形の遺物はなくなり、日常雑器の類の器種が大半を占める。94F区で比較的まとまって竪穴住居跡が検出されたが、平安時代の後半までは継続しないようである。93A区で同時期の竪穴住居跡が多数検出されたことも考慮すると、この時期の前半期までは集落が形成されていたと考えられる。しかしこの時期の末期には池が存在していたことから、今年度調査した範囲の付近では、次第に居住には不適当な環境に変化していったようである。　　（黒田哲生・飴谷　一）



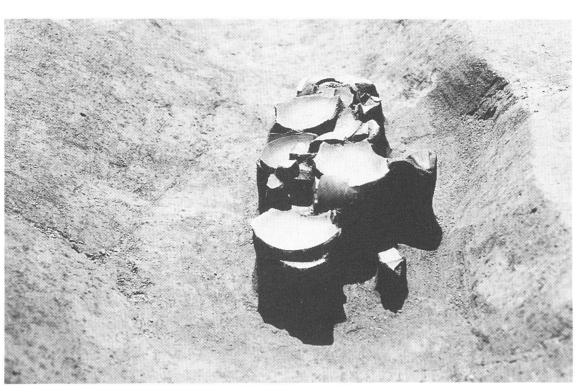
B期の大溝（白線左：後期、右：前期）（G区）



B期（後期）の池（白線部分）（E区）



B期（後期）竪穴住居（J区）



B期（後期）出土遺物（F区）

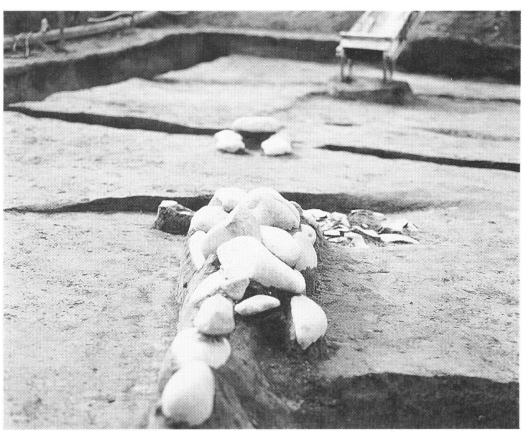
C・D期の遺構・遺物

C・D期の特筆すべき遺構は方形居館跡である。その区画溝は、A・D・C・M・Jの各調査区で検出された。南北の長さは100m余、東西はA区で検出されただけでも80mに達し100mを越えることが予想される。その構造に南北方向のものと東西方向のもので顕著な違いが見られる。南北方向のものは断面が皿形で深さが検出面から60cm余りであるのに、東西方向のものU字形で深さも検出面から120cm余りである。遺物の出土量も多く、特徴的なものとして北西コーナーからは数体分の馬の骨が、南西コーナーからは大量の土器とともに漆椀等の木製品が出土している。区画溝の内側には多数の溝がめぐり、内部をいくつかの空間に分割している。区画内の中央やや北よりからは無数のピットが検出され、この場所に掘立柱建物が存在したことが想定される。また、ピット群のあいだから石組みの配列遺構が検出されている。これは、区画溝の東西方向と平行するもので、その構造は同一幅で2列に並べた石の上に大きな石を蓋のようにのせたものである。あいだに1.7mほど石列のきれたところがあり、検出状況から意図的にあけたものと思われる。

区画溝の埋積後の遺構として特徴的なものにSX01（A区）がある。大量の土器片とともにその最下層から「天文八年（1539）」の紀年銘が記された木簡を検出している。区画溝



戦国期東西方向・区画溝の規模（A区）



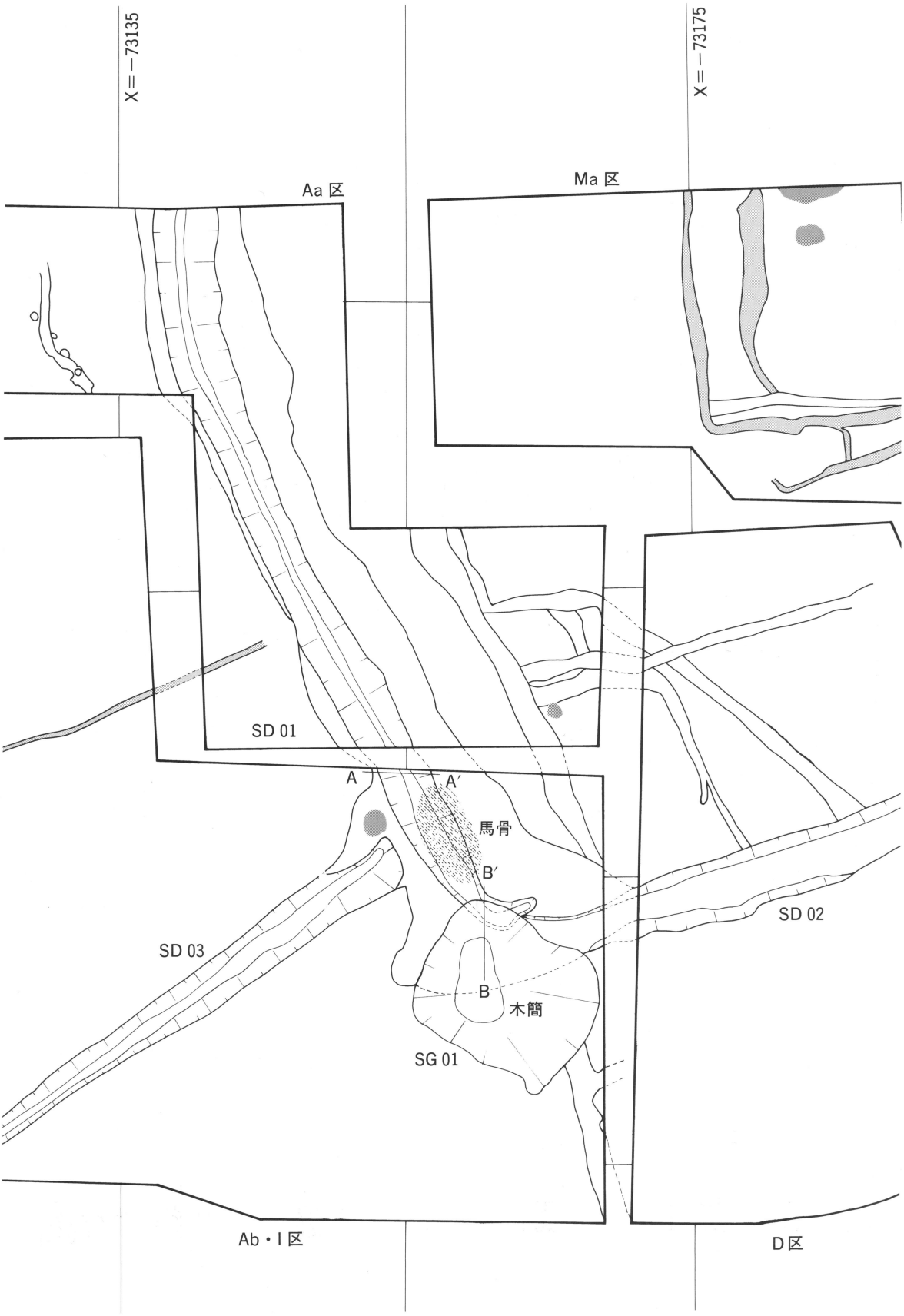
石組遺構検出状況（M区）



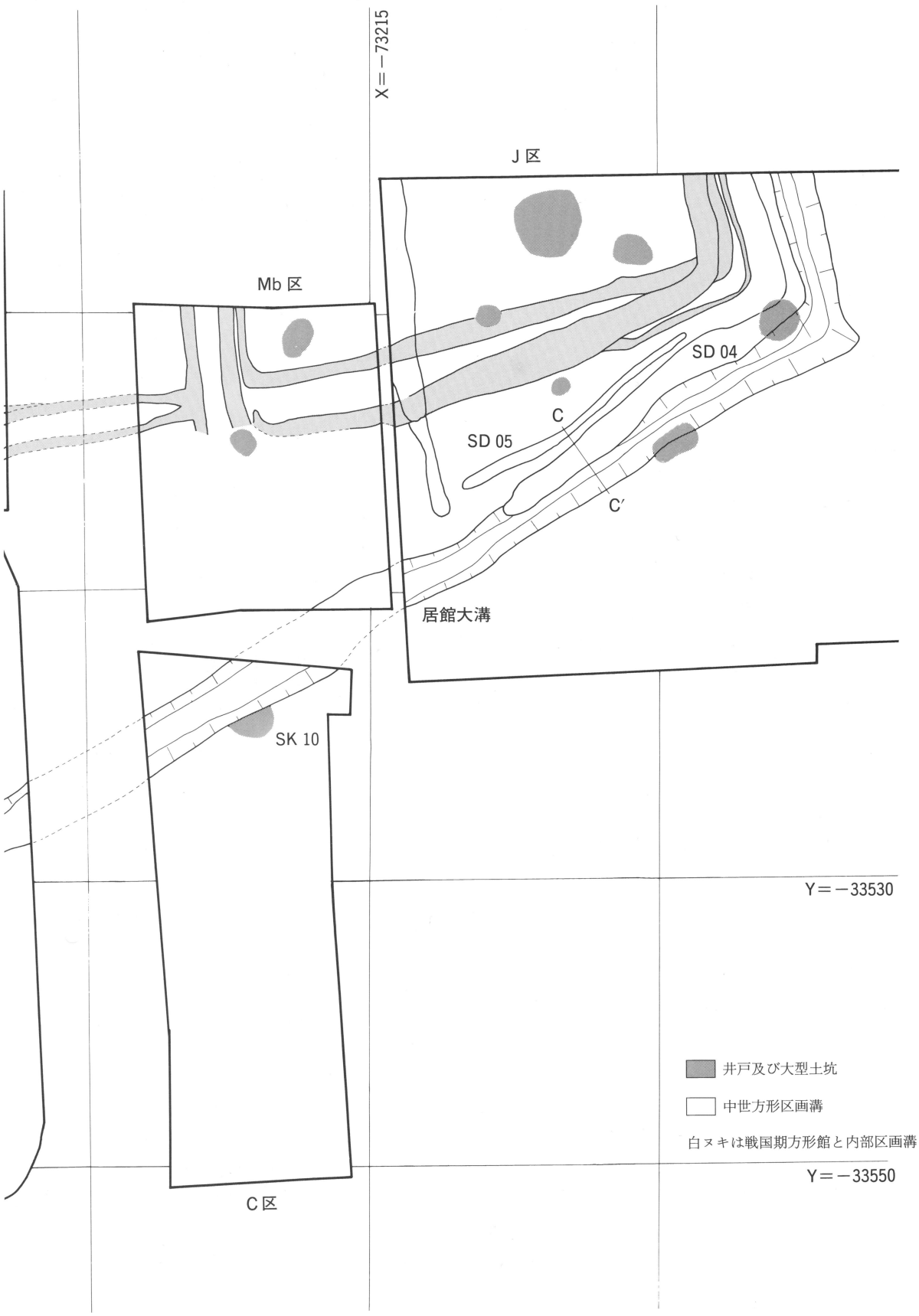
中世方形区画溝とピット群（M区）



SD01　土器出土状況（J区）

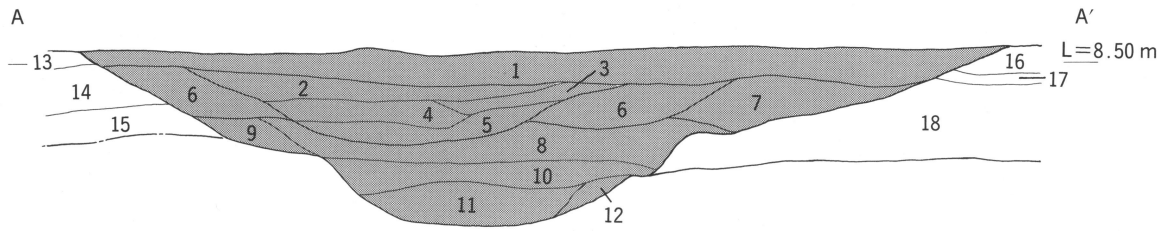


第 4 図　C・D 期主要遺構配置図（I：400）


X＝－73215
J 区
Mb 区
SD 04
C
SD 05
C′
居館大溝
SK 10
Y＝－33530
井戸及び大型土坑
中世方形区画溝
白ヌキは戦国期方形館と内部区画溝
Y＝－33550
C 区



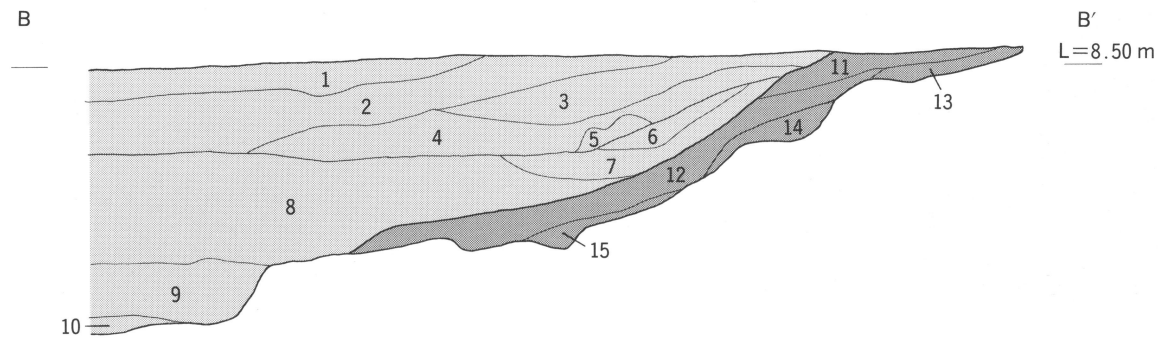
A・D・M・J区全景（C・D期）



1 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
2 5 Y 5/1 粘質シルト 沈鉄含む
3 5 Y 6/1 粗粒砂 沈鉄含む
4 2.5 Y 5/1 粗粒砂＋2.5 GY 8/1 シルトブロック 沈鉄含む
6 2.5 Y 6/1 粗粒砂 粘質をおびる 沈鉄を含む
7 10 YR 6/1 砂質シルト＋2.5 GY 8/1 シルトブロック 沈鉄含む
8 10 YR 5/1 砂質シルト 沈鉄含む
9 2.5 Y 7/2 細粒砂＋2.5 GY 8/1 シルトブロック
10 10 YR 4/1 粗粒磁＋10 GY 8/1 シルトブロック 沈鉄含む
11 5 PB 4/1 粗粒砂 噴砂が入る
12 10 GY 8/1 シルト＋5 PB 4/1 粗粒砂 縞状堆積

1～12 SD 01 埋土

13 5 YR 6/1 砂質シルト 沈鉄含む
14 5 Y 7/1 極細粒砂＋5 Y 6/1 粘質シルトブロック
15 7.5 Y 6/1 極細粒砂
16 10 Y 8/1 極細粒砂（洪水性堆積）
17 7.5 YR 5/2 砂質シルト 白色粗粒砂の間層が入る
18 5 Y 7/4 砂質シルト（上面のベース）

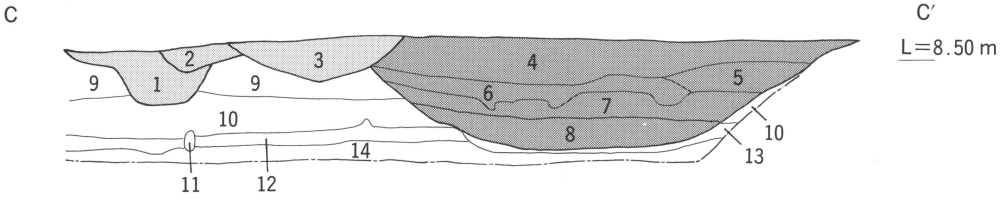


1 2.5 Y 7/1 粗粒砂＋5 Y 7/1 シルト 沈鉄含む
2 7.5 Y 6/1 粘質シルト 沈鉄含む
3 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
4 7.5 Y 5/1 粘質シルト＋2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
5 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
6 5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
7 2.5 Y 5/1 粗粒砂 白色粗粒砂の噴砂が入る
8 2.5 GY 5/1 粘質シルト 骨片・白色砂粒を含む
9 5 GY 5/1 粘土＋5 R 3/1 粘土ブロック＋10 G 7/1 シルトブロック 白色細粒砂の薄層をはさむ 骨片を含む
10 5 BG 4/1 粘土＋5 R 3/1 ブロック＋10 G 7/1 ブロック

1～10 SG 01 埋土

11 10 YR 6/1 粗粒砂 粘質っぽく沈鉄含む
12 10 YR 5/1 粘質シルト 白色粗粒砂を含む
13 2.5 Y 7/1 粗粒砂 沈鉄含む
14 2.5 Y 5/1 砂質シルト＋5 Y 8/1 細粒砂ブロック
15 5 Y 4/1 粗粒砂

11～15 SD 01 埋土



1 2.5 Y 4/3 シルト 黄褐色土が混じる（SD 05 埋土）
2 7.5 YR 4/4 砂質シルト
3 10 YR 3/4 シルト（SD 04 埋土）
4 10 YR 4/3 シルト 黄褐色土が混じる
5 10 YR 3/4 砂質シルト
6 2.5 Y 5/2 細粒砂が混じる粘質シルト
7 2.5 Y 4/1 中粒砂が混じるシルト
8 2.5 Y 4/2 粘土

4～8 SD 02

9 2.5 Y 5/3 粘質シルト
10 2.5 Y 4/4 シルト
11 10 YR 4/4 砂質シルト
12 10 YR 2/2 粘土
13 2.5 GY 4/2 細粒砂＋10 YR 2/2 ブロック
14 2.5 Y 5/3 細粒砂

から出土した土器とＳＸ01出土の土器とは余り時期差のないことから、区画溝は16世紀半ばごろに埋積したと思われる。なお、このＳＸ01は亀・貝・ヒシなどの大量の水棲生物も検出していることから短期的に池として存続していたことが想定される。ＳＤ01（Ｊ区）も区画溝埋積後の遺構であり、浅く掘り込まれた溝からは土師皿を多く含む大量の土器が出土した。

区画溝掘削以前の遺構として特徴的なものに灰釉系陶器の椀・皿を大量に出土したＳＫ10（Ｃ区）がある。これは井戸の廃棄後に廃棄土坑として利用したものと考えられる。また、Ｊ区中央部で時期差が多少あるものの２基並んで井戸枠のしっかり残った井戸が検出された。

今後Ｃ・Ｄ期について以下の点について考察を進めていきたい。

１　多数検出された溝を遺物や重複関係、溝の方向性から細かく時期区分し、各時期ごとの区画を復元する。

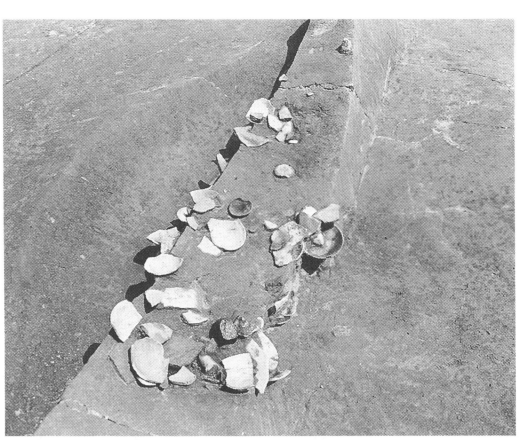
２　１をふまえ、遺物等の検討から溝で区画された方形居館の内部空間がそれぞれどのように利用されていたかを考察する。

３　ＳＸ01出土の木簡は、親の四十九日の追善供養を薬師如来に祈願した願文が書かれたものであるが、これの具体的使用法を調べるとともに区画溝出土の馬の骨が単なる遺棄か宗教的意味をもつものかも調べる。

４　方形居館の区画溝は「天文八年」以後余り時をおかずに埋積されたが、その後もここは居住域であった。しかし、出土遺物からみるかぎりそれも長期にわたるものではないように思われる。戦国期の文献資料を調べるなかで、この、区画溝の埋積・居館の廃絶の意味を歴史的に位置づける。さらに、大毛沖遺跡・田所遺跡などの近隣の遺跡のＣ・Ｄ期と同時期の様相を視野にいれつつＣ・Ｄ期の推移を捉える。　　（伊藤秀紀・樋上　昇）

追記

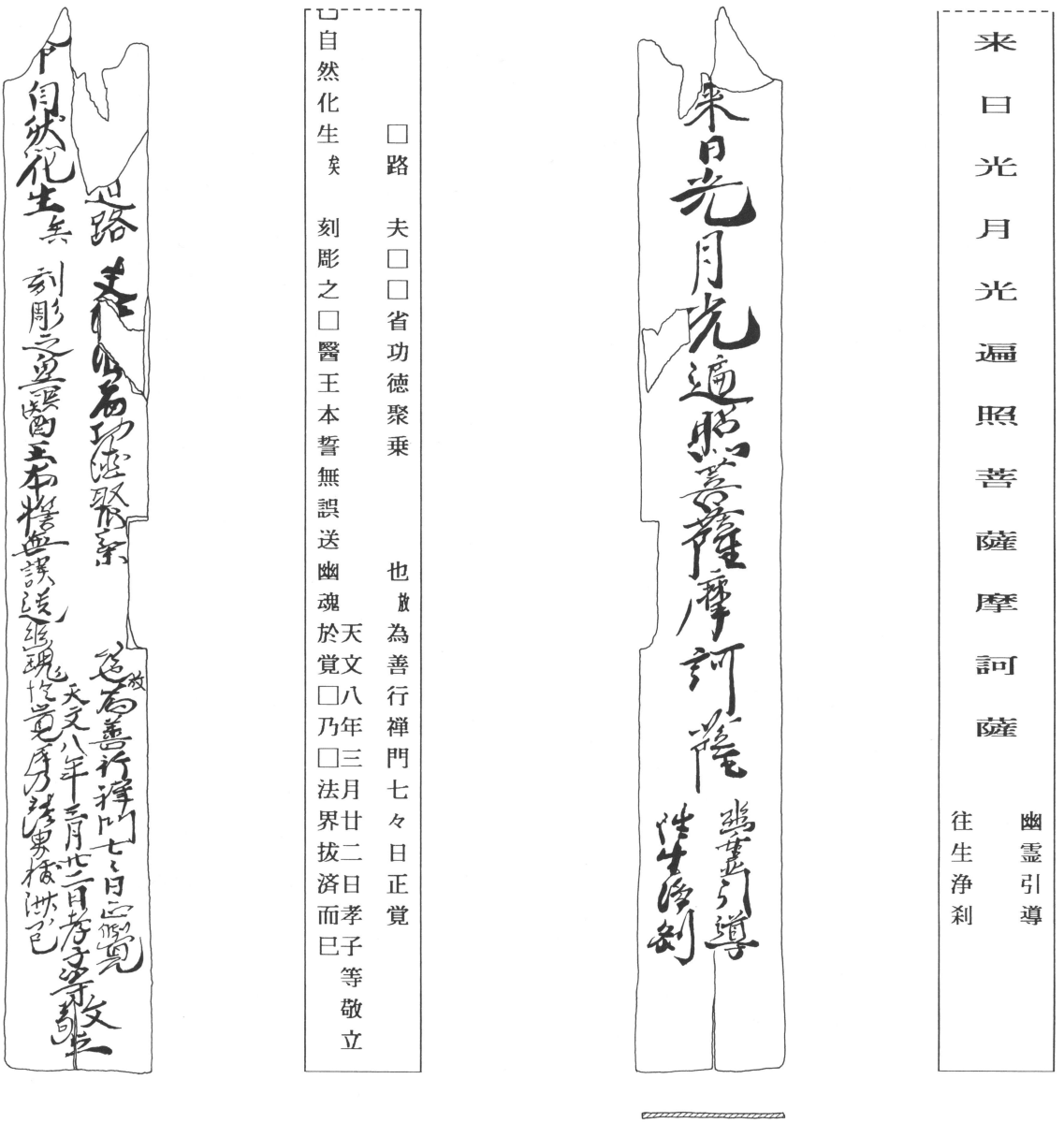
その後、出土遺物の検討から内部区画溝と思われていたものの中に戦国期方形居館より以前（12～13世紀）の方形区画があることがわかった。詳細は第４図を見ていただきたい。



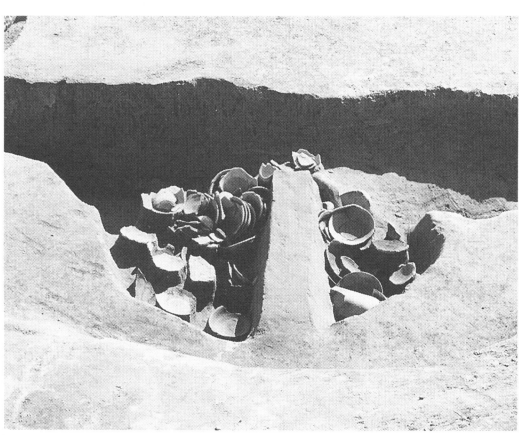
ＳＫ10土器出土状況（Ｃ区）



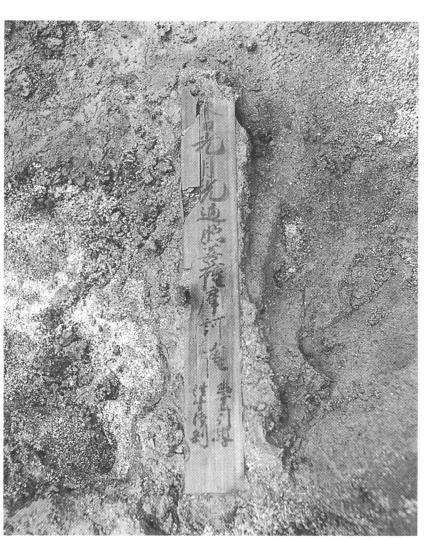
井戸枠検出状況（Ｊ区）



第６図　ＳＸ01出土木簡（Ａｂ区）　1/3



ＳＫ56土器出土状況（Ｋ区）



木簡出土状況（Ａｂ区）

大毛池田遺跡の自然科学

古墳時代前期の水田跡堆積物の基本層序は、白色極粗粒砂層を基盤として、その上位に①緑灰色粘土層、②黒色～黒褐色粘土層、③灰色～紫灰色粘土層、④灰褐色極細粒砂層の順に５層が確認できる。このうち②黒色～黒褐色粘土層が水田の床土に、③灰色～紫灰色粘土層が水田耕作土にあたり、③層をパックする形で④灰褐色極細粒砂層が覆う。以上の堆積層序は大毛池田の水田跡では普遍的に認められる。

②黒色～黒褐色粘土層は砂やシルト成分を含まず、堆積構造の見られない塊状均質な粘土層である。層厚はおよそ10cm程で、ほぼ水平に側方への連続性も良い。また、色調は非常に濃い黒色を帯び、堆積物を側方へ追跡する場合の鍵層的な役割を示す。プラント・オパール分析では、単層上部から若干のイネのプラント・オパールが認められるものの、全体に希薄である。本層は水田跡の床土と考えられる。③灰色～紫灰色粘土層は若干のシルト成分を含んだ塊状、均質な粘土層である。初生堆積構造は残っていない。層厚はおよそ10cmで、ほぼ水平に側方へ連続する。下位の②層とは明瞭な色調の差から区別でき、数mm～１cmほどの微少な凹凸面をもって堆積する。イネのプラント・オパールは単層全体で認められ、下部層特に②層との境界面直上でその密度が高い。本層は水田耕作土と考えられる。④褐色シルト質極細粒砂層は上記の③層を覆う砂層である。初生堆積構造として、比較的弱い流れを示すアンギュラー型のフォア・セット葉理が確認できるところ（ＡｂＩ区）もあるが、全体に堆積構造の残りは悪く、塊状を呈するのが普通である。基本的に側方へ層厚を減じるレンズ状堆積を示す。そのため層厚は、最大およそ30cmのところ（ＡｂＩ区）や、場所によっては中世の褐色シルト質粘土層が、本層を欠いて③層と直接癒着するところもあり変化が著しい。

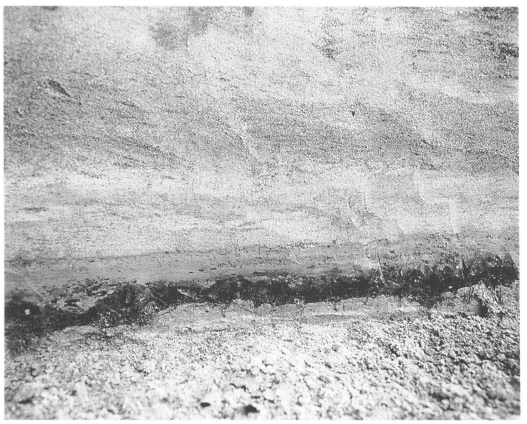
Ｆ区・Ａｂ区では、水田面上に足跡が確認された。水田耕作土の③灰色～紫灰色粘土層の上面に踏み込まれ、深さ約2～3cmの凹部をシルト質極細粒砂層が充填している。検出時には明瞭な色調の差となって識別できる。足跡はヒトやウシ、シカなどの偶蹄類、ウマなどの奇蹄類と推察されるものが確認される。これらは平面上に規則性なくランダムに配置し、歩行の方向性いわゆる行跡は認められなかった。また、水田面には乾裂などの乾燥履歴は認められない。このことは、耕作土が未固結時に足跡が付けられた後、洪水砂により一気に埋積されたと思われる。

Ａｂ区の溝、ＳＤ04からはウマの下顎骨３点、脚の骨５点が出土した。これらは塊状の暗灰色極細粒砂混じりのシルト層中より出土した。保存状態は悪く、藍鉄鉱が置換し表面の剥離が激しい。また、骨と共に戦国時代の遺物も出土している。

Ａｂ区ＳＸ01およびＪ区ＳＫ94では、カメの背甲が出土した。これらは植物片を大量に含む暗緑色粘土層から出土し、背甲は一部藍鉄鉱に置換されている。また、植物の種子および材などの大量な集積、甲虫の体節片、小動物の骨片、藍鉄鉱の沈積などから、この溝はかなり淀んだ滞水環境であったことが示唆される。

Ｅ区では古墳時代前期の水田面を切って、池を埋積する腐植質堆積物の集積が確認された。水田跡の基盤層である白色極粗粒砂層が、腐植質堆積物の集積部分で凹部をつくって

おり、明瞭な境界面をもって、その砂層の上位に黒色～黒褐色を呈する腐植質堆積物が埋積する。層厚は池の中央部でおよそ１ｍである。植物片の集積のみからなり、ときに厚さ数㎜の極細粒砂の薄層が挟まれる。（鬼頭　剛）



水田堆積層と上を覆う洪水性砂層（Ａｂ区）



Ａｂ区ウマの骨出土状況

まとめ　以下、今年度の調査成果の要点をまとめつつ、今後の検討課題をしめしておきたい。

Ａ期　昨年度同様に古墳時代前期の水田遺構を良好な状態で検出でき、方向性を持った大畦畔を基準に、小畦畔によって小区画水田が形成されている状況の認識を深めることができた。例えば水田面を水平に保つための工夫として、畦畔の高さを調節することで緩やかな起伏のある微地形を克服していることなどはその一例である。また、Ｇ区の例に見られるように水田の区画は小区画から大区画へと変化しており、当該期の生産力の問題を明らかにしていくことは今後の課題であろう。

Ｂ期　『尾張国正税帳』天平６年（734年）に葉栗郡司として「少領外従八位上勲十二等和爾部臣若麻呂」と「主帳外少初位上勲十二等伊福部大麻呂」の名がみえる。本遺跡に隣接した木曽川町門間地区に伊富利部神社が鎮座しているが、この神社は伊福部氏と深い関係にあると言われている。このことから本遺跡周辺は伊福部氏の勢力基盤であった可能性があることを指摘しておきたい。

Ｃ・Ｄ期　古代末から中世にかけて周辺には上門間荘や黒田荘が営まれるが、当該期の遺構としてはＥ区で検出された池跡やＦ区の溝等を除いては稀少であり、不明な点が多いのが現状である。むしろＤ期にいたり、遺構の密度や遺物の量ともに充実してくる点は重要である。しかもその大半が、ＡＤＣＪ区にまたがる区画溝周辺からであることから、戦国期において居館を築き、在地支配を行った勢力を考えざるを得ない。今後、文献の調査等も合わせ、その埋もれていた居館の実態を明らかにしていきたい。（杉浦　茂）

大 毛 沖 遺 跡

調査の経緯　大毛沖遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防および後背湿地に広がりが認められる遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団および愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として昨年度より実施している。今年度は国道22号線の西側を中心にＡ区～Ｉ区までの20,100㎡を発掘調査した。

調査の概要　昨年度の調査の結果、遺跡の中央部を北東方向から南西方向に流れていた旧河道の存在が明らかにされた。今年度の調査ではこの旧河道をＣ区・Ｄ区・Ｇ区で確認し、特にＣ区とＤ区ではこれを精査することができた。それによると古代前半では流れが認められるもの古代末には流路の変更により湿地化し、順次埋没が進み中世末段階には若干の凹地状を呈するものの平坦化した状況を解明できた。こうした変遷は大毛沖遺跡の形成及び展開に深く作用していたことと思われる。即ち旧河川の右岸域では概して遺構は稀薄であるのに対して、左岸域には古代に遡る住居跡も確認されており大毛沖遺跡の中心地が左岸域に展開するものと想定できた。しかし、右岸域にあたるＨ区では中世後半から戦国期にかけての遺構・遺物が多く検出されており、新たな遺跡の展開が読みとれる。　（高橋信明）



第Ｉ図　調査区位置図（Ｉ：5000）

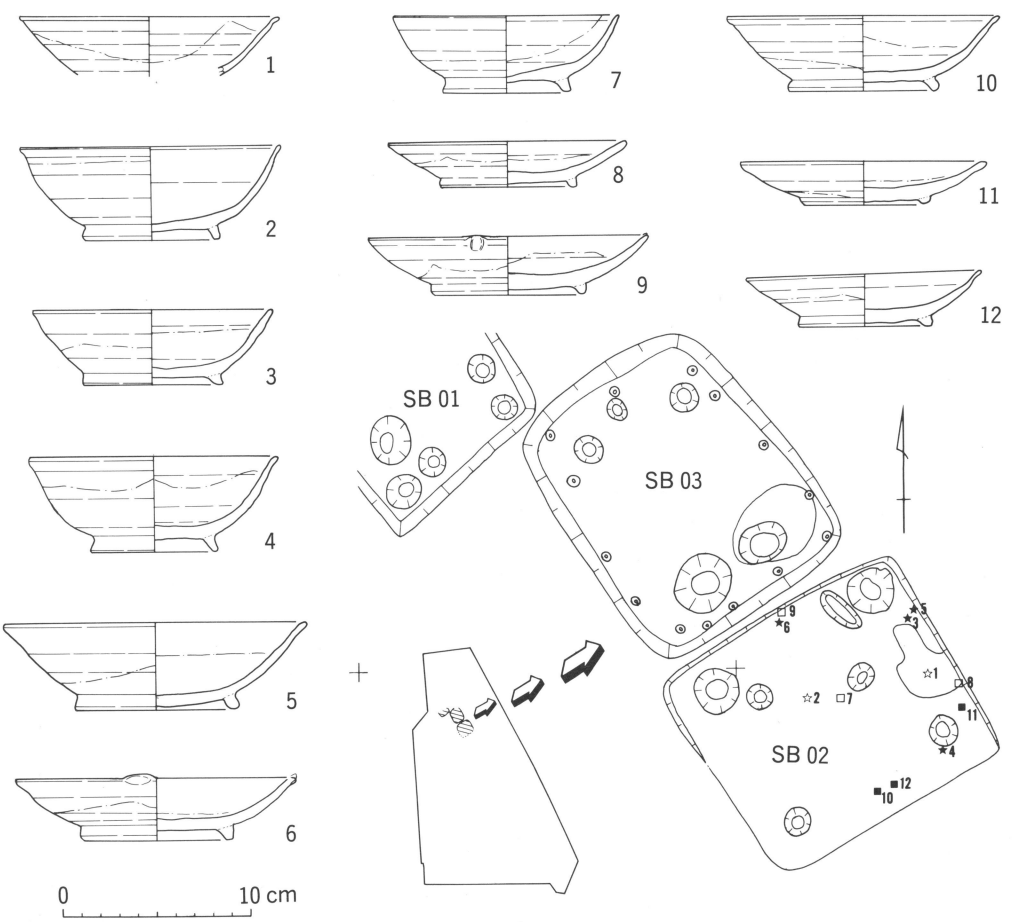
奈良・平安時代　C区では、調査区の南側で竪穴住居跡が７棟（奈良時代２棟・平安時代５棟）確認できた。このうちＳＢ06は規模が3.5×4.5m、造付竈を有する８世紀初頭の竪穴住居である。

Ｆ区では、調査区の北側中央で竪穴住居跡が３棟確認できた。

３棟のなかで、北側に位置するＳＢ01では、東側一辺４ｍのみ計測できただけで他の三辺が中世の溝により切られており全体の規模及び形態は不明である。住居内の柱穴は10ヶ所、灰釉陶器の椀、皿、土師器甕が出土。虎渓山１号窯式の製品が多く出土し、篠岡27号窯式、篠岡１号窯式の製品も数点出土している。

ＳＢ02は南側に位置し北側一辺3.5mと東側一辺３ｍが計測できた。長方形を呈した住居跡で柱穴は７ヶ所、美濃窯で生産された灰釉陶器、大原２号窯式（１、２）４点、虎渓山１号窯式（７～９）13点と尾北窯で生産された灰釉陶器、篠岡４号窯式（３～６）５点、篠岡27号窯式（10～12）３点と土師器甕が出土している。灰釉陶器の中では虎渓山１号窯式の製品が多く出土している。東壁中央には炭化物を含む焼土が厚く堆積していた。

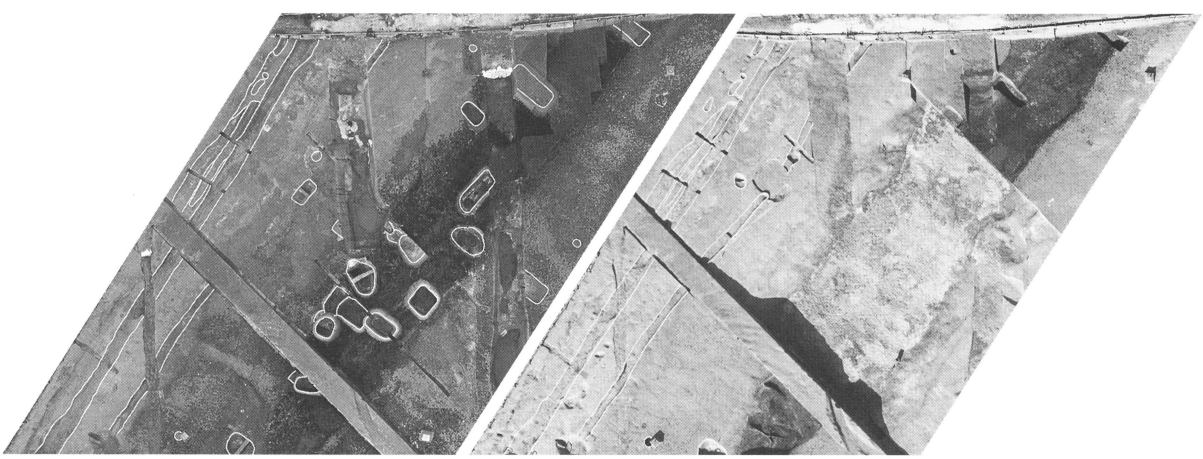
ＳＢ03は短辺2.7m、長辺3.4mの長方形を呈した住居跡で柱穴が５ヶ所、住居内を巡る小柱穴が14ヶ所、灰釉陶器の椀、皿が出土し、虎渓山１号窯式の製品が多い。（小澤一弘）



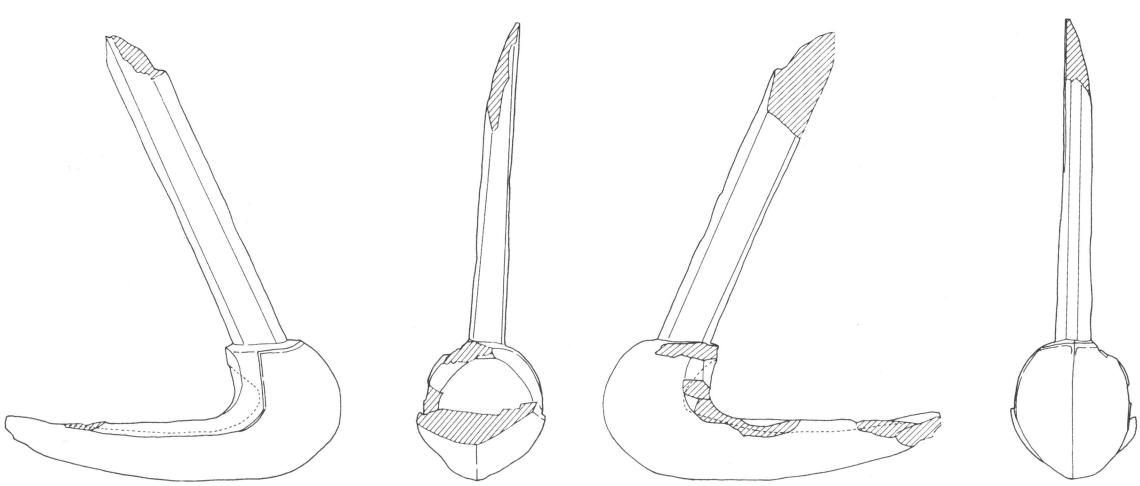
第２図　94Ｆ区　ＳＢ02出土遺物実測図

旧河道　北東から南西にかけて遺跡のほぼ中央を縦断する旧河道について述べる。その規模は幅約16m、深さ約70cmを測る。旧河道はおおよそ9世紀には流路が左岸側に移行し、その後、河跡湖となる。河跡湖の堆積についての詳細は、自然科学の項で述べているので、ここでは出土遺物を中心に述べる。河跡湖の堆積は大きく4層に分けられる。すなわち、河跡湖の深部にあたる最下層（緑色腐植質土・Ⅰ層）は9～10世紀代、湖岸から基盤層が流れ込んだ灰褐色粘質シルト・Ⅱ層は10～11世紀代、これらを覆う黒褐色腐植質土層・Ⅲ層は12～13世紀代である。またⅢ層より上位層は12～15世紀代を中心とする方形土坑が散在する。

木製鐙　特筆すべき遺物は、木製の鐙（Ⅱ層）と鉄製羽釜（Ⅲ層）があげられる。鐙の形態は舌長鐙、吊手部と踏込・舌部が一体となった一木造、全面に漆を施している。鳩胸部中心に入る稜線と吊手部の傾きから左足用と考えられる。時期は、層位から10～11世紀代と考えられる。羽釜について、鍔端部は欠損しているものの遺存状態は良い。側面観は砲弾形を呈し、直線的に立ち上がる口縁部と丸い底部を持つ。外底面中央には丸形湯口が残っている。口径は19.2cm、器高は24.1cmである。時期は層位と形態から12世紀後半と考えられる。



D区　旧河道Ⅲ層上面　　D区旧河道Ⅰ層除去後（中央部分）



第2図　木製鐙実測図（1/6）

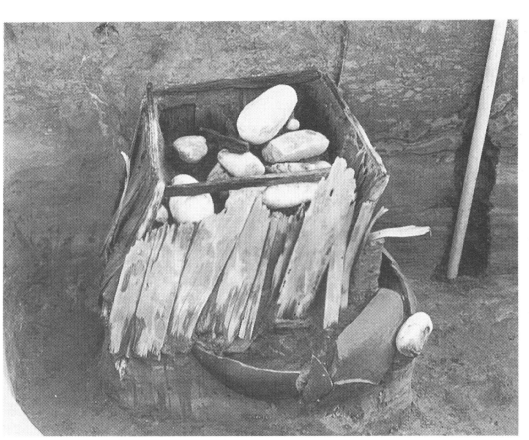
鎌倉・室町時代　遺構は河跡湖を基軸とした展開を示す。河跡湖の両岸には13～15世紀の溝が２～３条めぐる（C・D・E区)。溝の規模は、幅30～50cm、深さ10～30cmである。出土遺物については、灰釉系陶器の椀類が中心で稀少ながら見られる。河跡湖とその右岸には方形土坑群が散在する。河跡湖の上位層に展開する方形土坑は、規模が大型（1.5×４m）・中型（１×２m）・小型（１m四方）の３種ある。また、河跡湖の両岸に並行して展開する溝に対してこれらの方形土坑は主軸が直交あるいは並行する。ただ、方形単位など企画性のある構成は認められない。これらの状況は93G・D区と一致し河跡湖の上位層にほぼ連綿と続くことが確認できた。遺物としては、D区SK13の最下層より出土した12世紀の三筋壺以外は小片が多く、少量である。方形土坑は河跡湖上だけではなく、その右岸域にも展開する（B・E・I区)。河跡湖上の方形土坑より比較的まとまりをもって構成する。特にE区では、河跡湖に対して長径が直行あるいは並行するものがあるものの、これらの方形土坑群は全体的に河跡湖にほぼ縦列配置となる。

昨年度の調査から鎌倉時代を中心とする居住域は旧河道の左岸域（93A・B・C区）で確認している。右岸域では井戸を２基確認したものの（93G区)、居住域と推定できる区画溝やピット群などは認められなかった。本年度の調査では、15世紀後半から16世紀初頭の遺構が集中するH区から井側の残る３基を含めた井戸が８基確認できた。なかでもHb区SE03は井側と井筒（曲物）の下部から、破損はしているものの井筒に転用した13世紀末から14世紀初頭の常滑産甕が出土した。また、木製礎板をもつ掘立柱建物も１棟確認している。以上のように旧河道の右岸域にも居住域が展開することが確認できた。

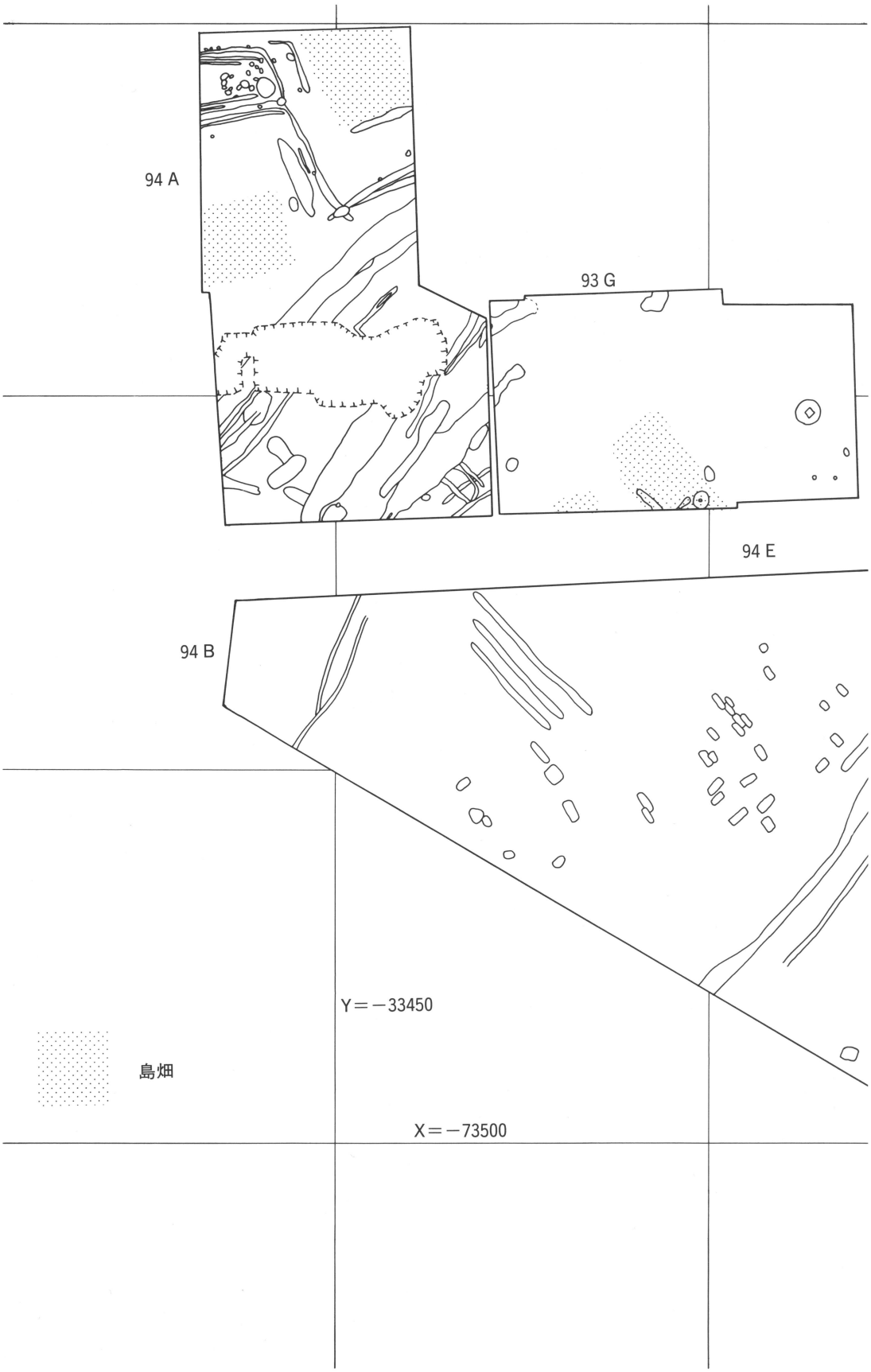
島　畑　昨年度、大型竪穴状遺構として報告した93C・G区に展開する遺構は、『明治17年地籍図』にみられる「内畑」の表記箇所と一致し、島畑状遺構と改める。また、本年度の調査区ではA・C・F区で同様の遺構が７箇所検出できた。さらに方形状のプランの堆積が逆台形、すなわち遺構検出面より上位に島状の高まりとなることが明らかになった。包含する遺物は平安時代の灰釉陶器・土師器から14世紀の灰釉系陶器まで含まれている。したがって、「島畑状遺構」の形成時期は14世紀以降になるであろう。　（永井宏幸）



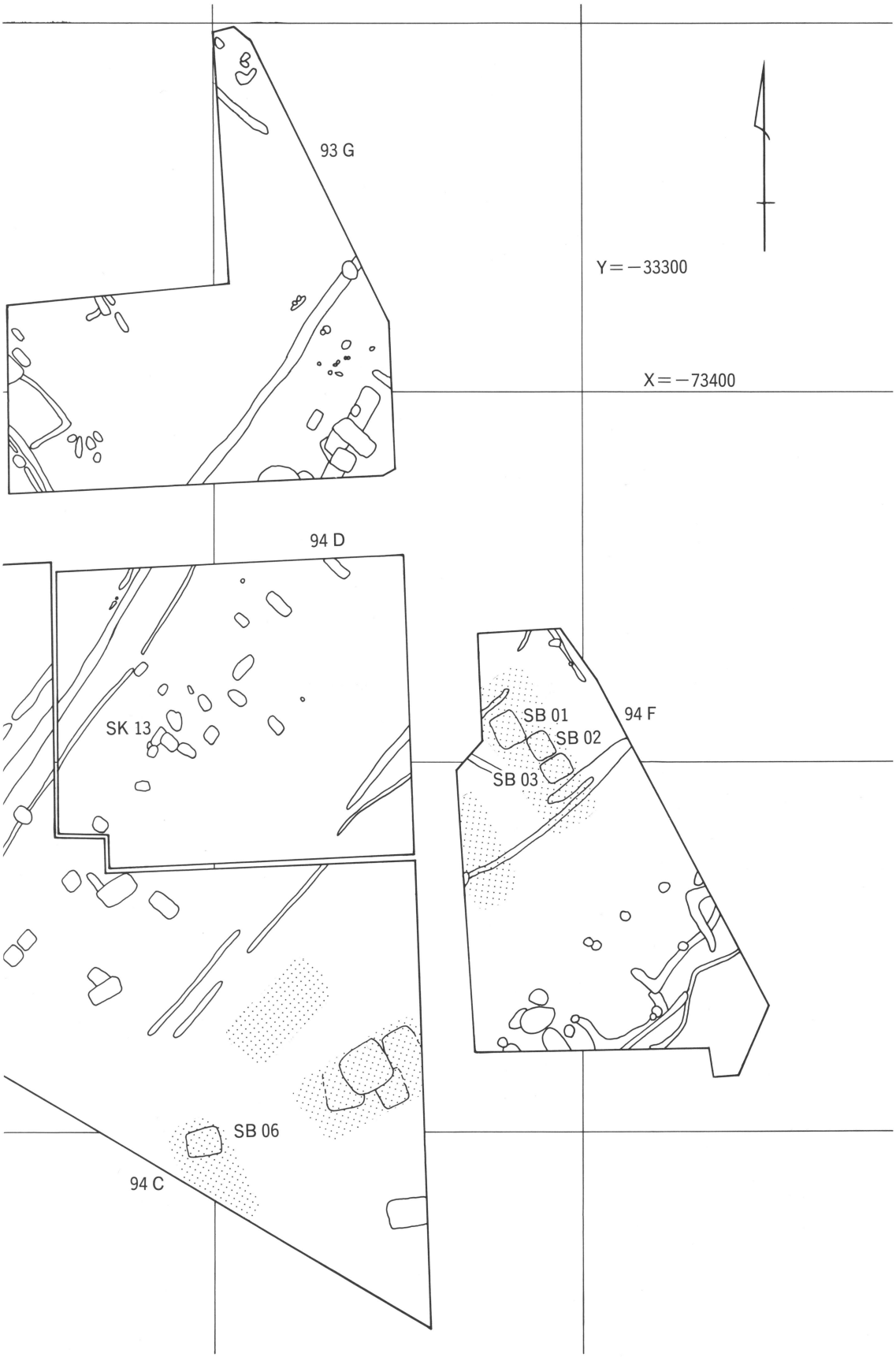
鉄製羽釜



Hb区　SE02



第4図　93G区・94A～F区主要遺構配置図（Ⅰ：800）


93 G
Y＝－33300
X＝－73400
94 D
SK 13
SB 01
SB 02
SB 03
94 F
SB 06
94 C

戦国時代　戦国時代の遺構はH区に集中し、H区中央部分の東西方向に平行する北の溝群（ＳＤ08、09、11）と南の溝群（ＳＤ02～04、18）によって画された区域内でほとんどの遺構が検出された。（第５図）

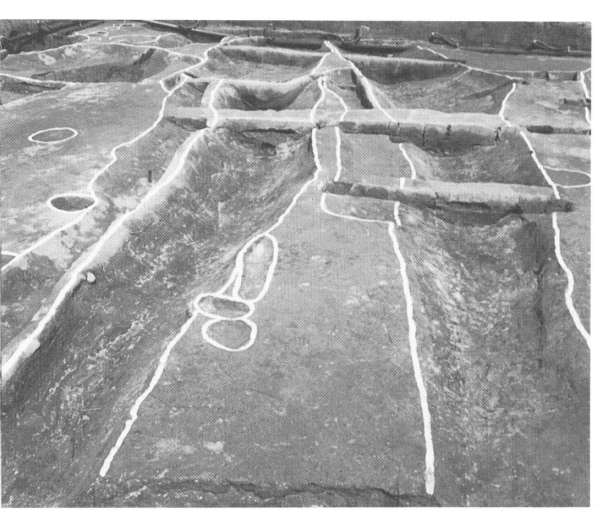
遺　構　二つの溝群のうち検出面で最大の溝はＳＤ18で、幅5.6m、深さ0.8m、断面は緩やかな傾斜のＶ字形である。ＳＤ03は、深さ約0.2mと浅く、他の溝の埋土はシルトであるのに対し、白色粗砂が堆積している。北の溝群の新旧関係はＳＤ11は単独で存在し、ＳＤ08→09の順である。南の溝群は、ＳＤ03、18が単独で存在し、ＳＤ04→02の新旧関係である。溝群に区画された区域には、小規模の溝、土坑が検出された。溝は溝群の軸に対して概ね平行かあるいは直行する方向であり、ＳＤ14、25、27などは直角にまがり、溝がクランク状に連続する部分がある。いずれも深さ0.3～0.4mで断面Ｕ字形のものが多いが、ＳＤ13、14は緩やかな傾斜のＶ字形である。土坑は南半分に比較的多く検出された。柱穴と考えられる小土坑は集中して検出されたが掘立柱建物等は確認されなかった。大形の土坑はいずれも浅く、検出面から深さ0.2～0.3mである。

遺　物　出土遺物は、大部分が15世紀後半から16世紀前半の時期に属す。溝の遺物は特定の溝から集中して出土する傾向がある。ＳＤ09からは16世紀初頭の古瀬戸陶器類、土師器（皿、鍋）、漆椀、各種木製品等が出土した（第６図）。ＳＤ14、18、19からは土師器皿がまとまって出土している。ＳＤ18からは底から浮いた状況で円礫が多量に検出された。ＳＫ106、107、174からは土師器（皿・鍋）と木製品等がややまとまって出土している。

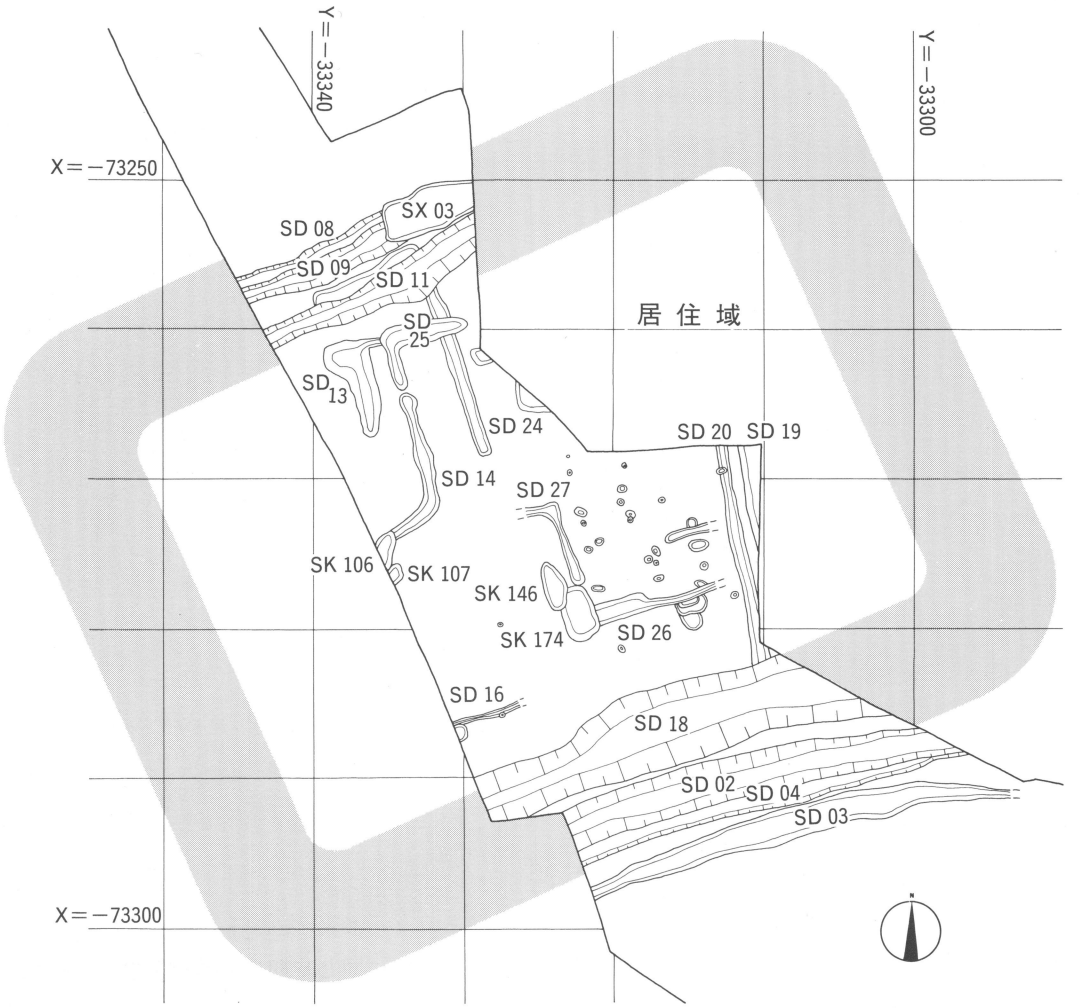
居住域　ほぼ同時期の平行して走る二つの溝群に画された区域に同じ時期の遺構が集中して存在することから、周囲に溝を巡らす集落あるいは屋敷地などの居住域をこの部分に想定することが可能である（第５図）。この場合、居住域に対して内側にある切り合い関係のないＳＤ11－18が対応し、また、新旧の切り合いのあるＳＤ09－02、ＳＤ08－04が対応関係にあると考えられる。ＳＤ03は、埋土、規模及び断面形状から他の溝と性格が異なるものと考えられる。居住域の南北は最大約45mであるが、東西辺は調査区外であり確認できない。今後細かい遺構の時期的な変遷および性格が検討課題となる。　（酒井俊彦）



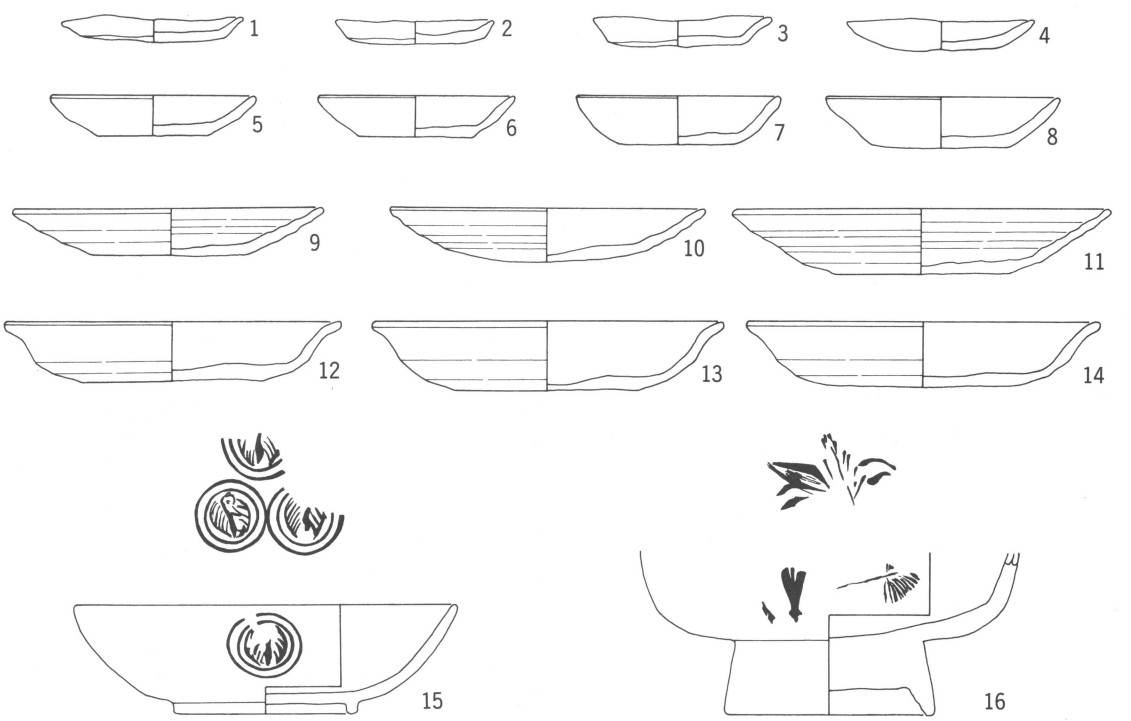
H区　ＳＤ09遺物出土状況



H区　ＳＤ08・09・11



第５図　Ｈ区戦国時代遺構図（1/500）



第６図　Ｈ区ＳＤ09出土遺物（1/3）　土師器皿１～14　漆椀15・16

自然科学　大毛沖遺跡Ｃ区及びＤ区において調査区を北東から南西方向に切る形で、腐植質に富む堆積物が旧河道を埋積する様子が確認された。以下ではＤ区の断面について説明する。堆積物は中粒～粗粒砂を基底とし、その上位に①緑色腐植質土、②黒色腐植質土、③灰褐色粘土質シルト層、④黄灰色粘土質シルト、⑤黒色腐植質土、⑥暗褐色粘土質シルト、⑦暗灰黄色シルトの７層が堆積する。①緑色腐植質土は、基底の粗粒砂層の直上に明瞭な境界面をもって堆積する。本層は分解の進んだ植物遺体のみからなり塊状・無層理で、砂など他の粒子をほとんど含まない。②黒色腐植質土は、単層内に厚さ数㎜程度の極細粒砂の薄層を挟み互層を呈する。

②黒色腐植質土は河道の肩部に向かって標高を上げながら、③灰褐色粘土質シルト層内に挟まれる。河道中央部では①緑色腐植質土の直上に②層が癒着する。また、④黄灰色粘土質シルトを欠いて、より上位の⑤黒色腐植質土が②黒色腐植質土に癒着しているのも確認される。基本的に②層から⑤層までは、下位の層をより上位の層が河道肩部に向かって覆ってゆくオーバーラップ構造を示す。これは河跡湖が徐々に埋積されていく過程を示すものである。



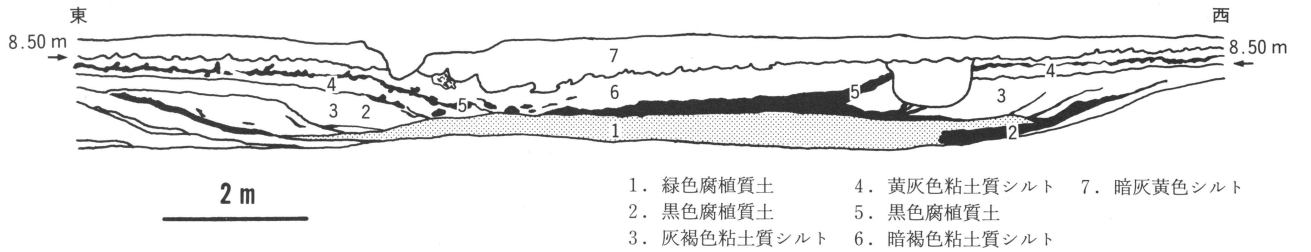
Ｄ区　河跡湖断面（北から）

⑤黒色腐植質土は波長約50㎝、波高約数㎝の軽微な褶曲構造を伴っている。平面では黒色腐植質土と④極細粒砂質シルト層が判然と入り交じった斑状形態を示す。堆積物が固結時に、地震による繰り返し応力を受けた結果生じた脱水構造である。

基盤砂層は淘汰良好で、粘土やシルト成分をほとんど含まないクリーンな砂からなる。極粗粒～粗粒砂から極細粒砂に至る上方細粒化傾向を示す。層理は河道の西側において東傾斜を示し、全体に西方から東方への側方付加（lateral accretion）が確認される。このことから、旧流路は河道を東方に移動させながら、徐々に勢力が衰え９世紀から１２～13世紀にかけて水生植物が繁茂する滞水環境に移り変わったことがわかる。

③灰褐色粘土質シルト層からウマの下顎骨２点、部位の不明なものが数点とカメの背甲も１点出土している。いずれも藍鉄鉱（Vivianite）が沈着し、保存状態は悪い。また、②黒色腐植質土からヒメコガネやマメコガネ等の甲虫の体節片も出土した。

基盤砂層直上から長さおよそ２m、径およそ50㎝の広葉樹の材が、流路の方向と平行に埋積していた。一般に、流下してきた木材は流向に平行して堆積することが知られており、本木材も流路が機能していたときの堆積物と推定される。また、木材の表面は炭化しており、流路両肩部では炭化物の集積が確認されている。　（鬼頭　剛）



第７図　河跡湖堆積物断面図

まとめ　　今回の調査によって下記の成果が得られた。

１．Ｃ区では、奈良時代の住居跡（８世紀初頭）が２棟検出できた。昨年度の93Ａ区で検出したＳＢ08・09（７世紀後半）に続く時期にあたる。また、平安時代の住居跡は、Ｃ・Ｆ区で計８棟検出できた。奈良時代の住居跡のように造付竈がはっきりとはしないが、焼土や炭化物が部分的に確認できる。したがって、何らかの炊事場的な空間が住居のなかで想定できる。時期的には10世紀後半代が中心となる。奈良・平安時代の集落は多くても２～３棟単位の小規模な集落が想定できる。

２．Ｃ・Ｄ区にまたがる旧河道からは、重要な遺物が出土した。まずは木製鐙。時期的には不安定なものの、同一層位の遺物から10～11世紀代に比定できる。この時期の鐙としてはもちろん遺跡からの出土例が少なく、全国的に見ても20遺跡（壺鐙・輪鐙を含む）に満たない。次に鉄製羽釜。鐙と同様に、同一層位の遺物から12世紀後半に比定できる。鉄製羽釜は再生することが可能なため、全国的に見ても出土例が極めて少ない。平安時代末期の鉄製羽釜として重要な資料といえよう。

３．旧河道の時期的な変遷が明らかになった。８世紀代までは流路で、それ以降は河跡湖となる。また、13世紀以降は河跡湖の両岸を区画する溝が、河跡湖の上位には方形土壙が見られる。

４．Ｈ区では井側が確認できる井戸が４基検出できた。時期的には13～14世紀を中心とする。なかでも、Ｈｂ区ＳＥ02は井筒の曲物の下から常滑産甕を有する井戸が検出され、その形態から注目できる資料である。

５．Ｈ区からは15世紀後半から16世紀初頭の区画溝が検出できた。南北で最大45ｍの規模で、近接する池田遺跡で確認された約100ｍ四方の区画溝を有する居館跡との関係が今後の検討課題となろう。

（永井宏幸）

門 間 沼 遺 跡

調査の経過　門間沼遺跡は、葉栗郡木曽川町大字門間字沼に所在する。遺跡およびその周辺は、地籍図などによれば、区画整理前にはかつて所々に畑が点在しており、遺跡が木曽川によって形成された標高８～９ｍの微高地上に立地していることを示している。しかし現状は一帯が水田地帯となっているために、それを窺うことはできない。

ところで、門間沼遺跡を含めた周辺一帯では、以前から農作業のおりに遺物が出土していることから、地元住民には遺跡の存在が知られていた。昭和39年に始まった区画整理では、浅いところで50㎝、深いところでは１ｍ以上の深さまで土の掘り返しや移動が行われ多くの遺物が出土した。これを契機に木曽川町教育委員会に門間遺跡調査委員会が設けられ、昭和44年から昭和46年にかけて調査が行われた。その結果、３ヶ所の調査地点で古墳時代の遺物が出土し、ほかに弥生時代や中世の遺物も出土した。このことから「門間遺跡」が古墳時代を中心とする大規模な遺跡であることが判明した。また、大きな河原石が出土していることや、一帯に「塚」のつく地名が多いことから、付近にはかつて古墳群が存在していた可能性が高いと考えられている。実際、門間遺跡の東方には浅井両古墳群が、南西には今伊勢古墳群が存在し、第３の古墳群の存在が期待された。

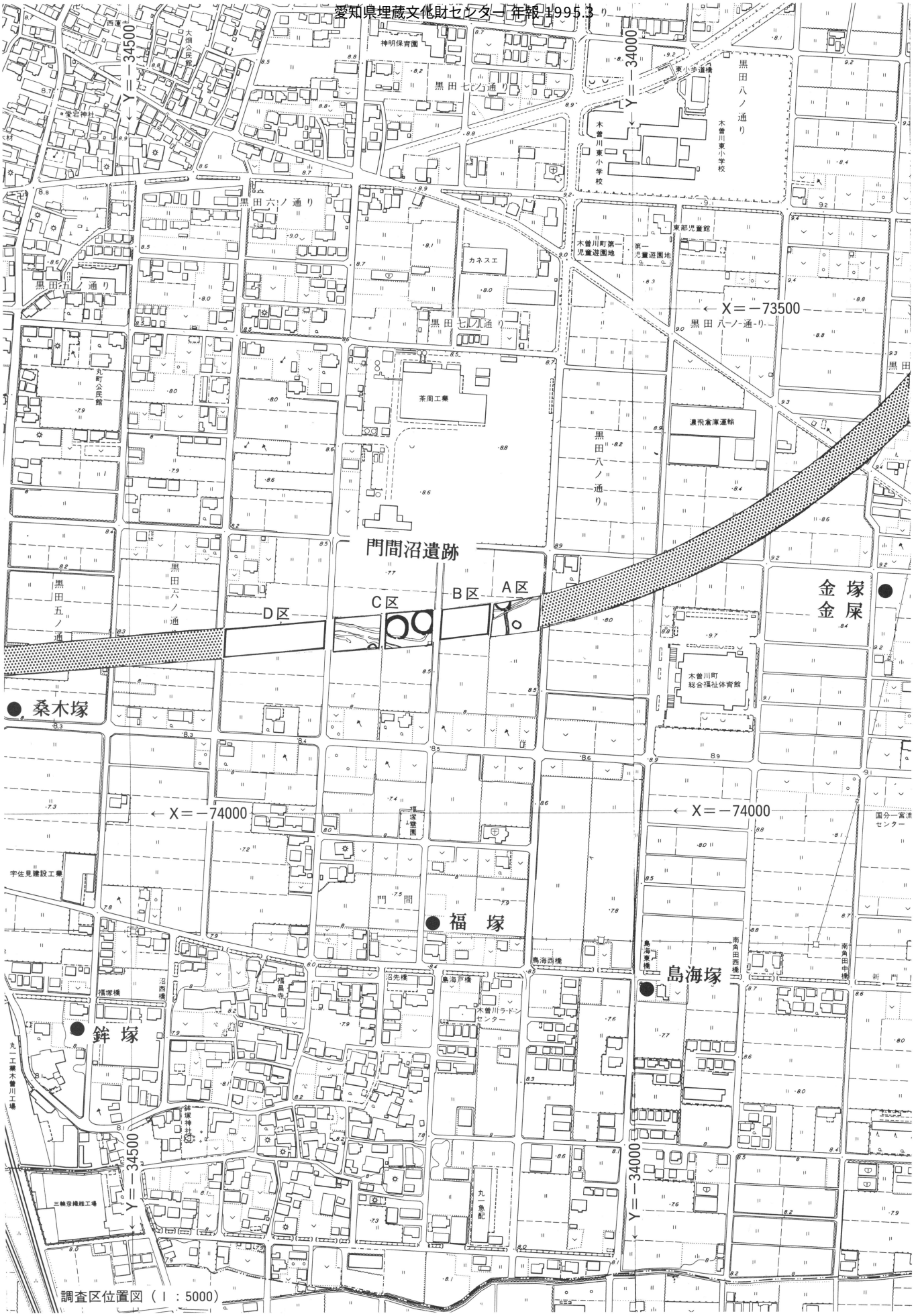
調査の概要　今回の発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に先立つもので、日本道路公団・愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、本年４月より当センターが調査を実施した。道路予定地は門間遺跡の北西部を通っているが、遺跡の範囲が広大であることから、付近の小字名をとって「門間沼遺跡」と表記している。

本年度の調査予定面積は10000㎡で、これを東のＡ区から西のＤ区まで４つの調査区に区分して調査を進めた。調査区は以前は水田であり、まず耕作土を重機で除去し、その後にベルトコンベアーを設置して発掘作業員を投入し人力による掘削を進めた。また、地下水の湧出に対処するためにウェルポイントを設置して地下水の強制排水も行った。

発掘調査の結果、次のことが明らかになった。

門間沼遺跡は、大きく弥生時代中期初頭、古墳時代、古代末から中世の３時期に区分され、そのうち古墳時代に属す遺構・遺物の密度がもっとも高いことから、やはり古墳時代を中心とした遺跡であることが確定した。ただ、旧表土である黒褐色シルトが検出されずその下の砂層がそのまま遺構検出面になっている部分があることから、遺跡の上部が区画整理によって削平されていることも発掘調査によって確かめられたのであり、本来存在した時期の遺構・遺物の全てが明らかになったわけではないことも、ここにつけ加えておこう。

なお、以下では本年度上半期に調査したＡ・Ｃ区を中心に報告する。


門間沼遺跡
A区
B区
C区
D区
← X＝－73500
← X＝－74000
← X＝－74000
Y＝－34500
Y＝－34000
Y＝－34500
Y＝－34000
桑木塚
福塚
島海塚
鉾塚
金塚
金屋
黒田八ノ通り
黒田七ノ通り
黒田六ノ通り
黒田五ノ通
木曽川東小学校
木曽川町総合福祉体育館
茶周工業
カネスエ
濃飛倉庫運輸
木曽川ラドンセンター
三輪産繊維工場
丸一工業木曽川工場
宇佐見建設工業
丸一急配
調査区位置図（1：5000）

A区の遺構・遺物　A区では、古墳時代前期の溝、6世紀中頃の円墳と同時期の掘立柱建物、中世の溝と土坑が検出された。

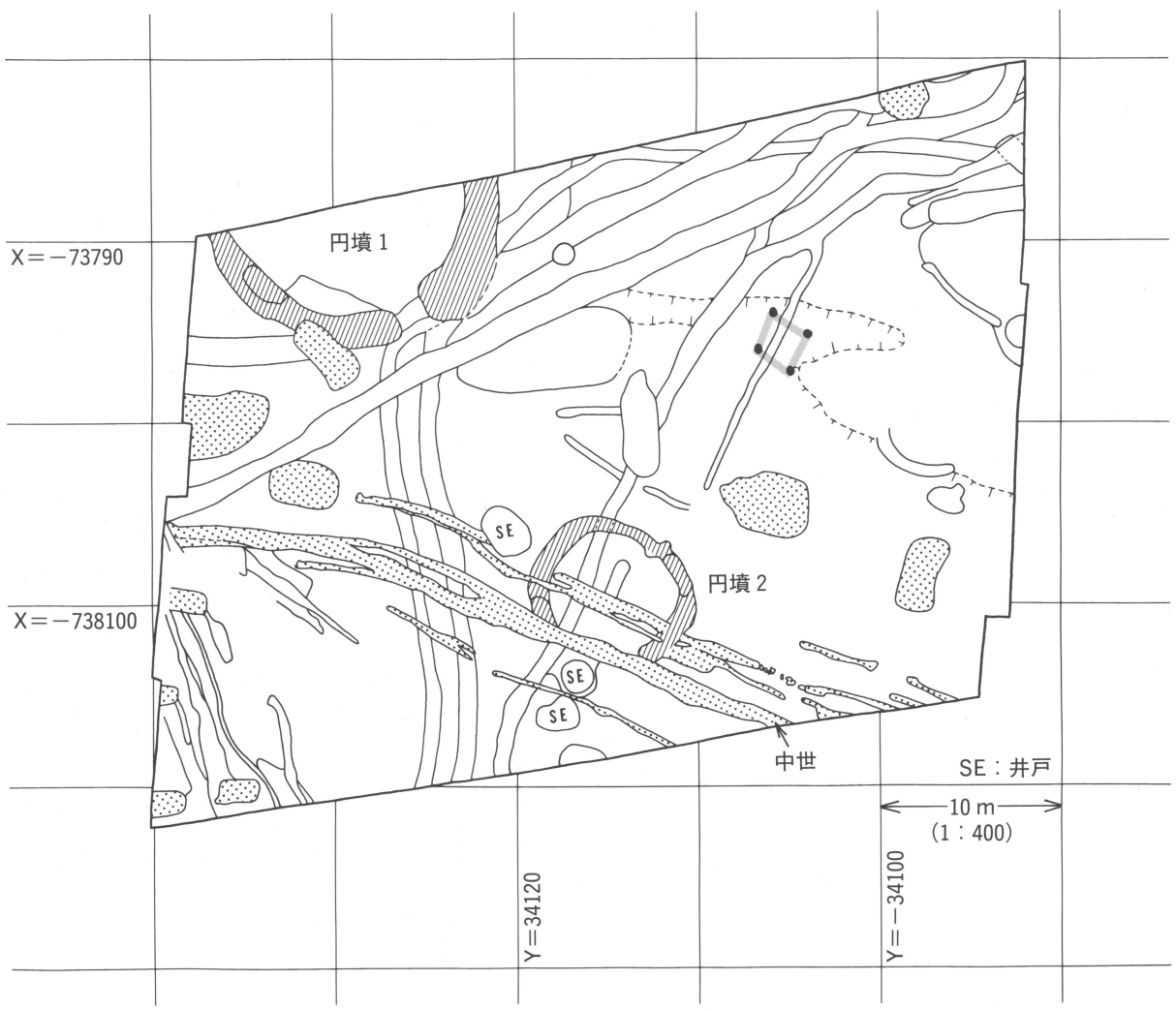
古墳時代前期の溝（下図白ヌキ表示）は、埋土にほとんど遺物を含まず時期の認定に困難を伴ったが、円墳1の周溝に切られていることからそれ以前であること、また最低3回の重複が認められ、さらにそれぞれ改修されていることから、意外に時期幅があると予想された。注目されるのは、溝が平行して掘削されていることで、溝に挟まれた帯状の部分が「道」であった可能性を強く示している。

円墳1は直径約14mで、周溝が南で切れ、この付近から須恵器（𤭯2・壺1）、土師器（高杯2）が出土した。円墳2は直径約7mで、プランは不整円形であり、方形プランがくずれたものかもしれない。遺物は出土していない。

掘立柱建物は、円墳1・2と三角形をつくる位置にある。柱間は1間で、北東柱穴から丸底甕が出土した。

中世は、自然埋没の大形土坑（内部から円礫が出土した：集石土坑を含む）3基の他に、斑状の埋土が充塡された規格的な方形土坑が検出されている。

他には石鏃が数点出土している。



C区の遺構・遺物　C区では本年度の4調査区のなかで古墳時代前半期の遺構・遺物が最も密に検出された。また、下層に弥生時代中期初頭の包含層が部分的に遺存していることも明らかになった。

弥生時代中期初頭に属す遺構は土坑が2基のみである。しかし、土器はそれ以外からも出土しており、しかも年代がほぼ中期初頭に限定されていることから、古墳時代の遺構・包含層から多数出土した各種石器類（伐採斧・加工斧・スクレーパー・粗製剝片石器（光沢のあるものと無いものがある）・石鏃・タタキ石・凹石など）もこの時期のものであることがほぼ確定できる。一時期の石器組成を知ることができる良好な資料である。

古墳時代前半期の遺構には、中央の幅約10mの溝状凹地の方向に沿って東西に走りC区東部で北に折れる溝1と、南北微高地を中心に展開する竪穴建物・掘立柱建物・井戸・溝2・3・4・5、平行する小溝群などがある。

このうち溝4は、断面が箱形を呈し、底面には浅いピット状の窪みが規則的に並んでおり、古墳時代の方形居館論議で取りざたされている区画施設（塀の基礎構造）に類似している。時期は古墳時代前半期初頭に属す。そして同時期の井戸や平行小溝群、大形土坑群などが北微高地縁辺において、溝1と溝4に挟まれた区域にそれぞれまとまりをもって展開するという空間配置が認められる。それ以外にも地割り線のような小溝が南北微高地で検出されている。

南微高地では、土坑の掘削・埋め戻しが連続的に行われた土坑列が検出された。土坑の配置は最終的に南東に陸橋部をもつ方形周溝墓状のプランを呈している。土坑が連続的に掘削されていることは、一定の境界認識が前提されていたことを窺わしめているが、さらにこの土坑列と溝状凹地の間に溝3が掘削されており、これも境界、つまり宅地区画を表示していると考えられる。そして土坑列の切れ目に近接して井戸が2基検出されている。

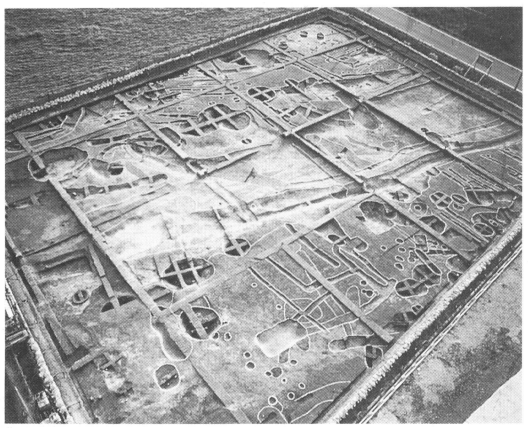
古墳時代前半期後半の遺構では、C区東部で検出された竪穴建物が注目される。竪穴建物はほぼ正方形で、少なくとも3棟存在する。この付近には柱穴も多数集中しており、掘立柱建物あるいは柵列等の存在も考えられる。この時期には建物群の範囲が拡大した模様である。溝1の埋没はこの時期に進行し、上層に土器なども投棄されている。

古墳時代後半期の遺構は、C区西部で集落関係の遺構群が、東部で円墳の周溝など墓域関係の遺構群が展開している。

北微高地では梁間1間の掘立柱建物が1棟検出され、抜き跡が良好に遺存していた西柱穴跡からは宇田型甕・



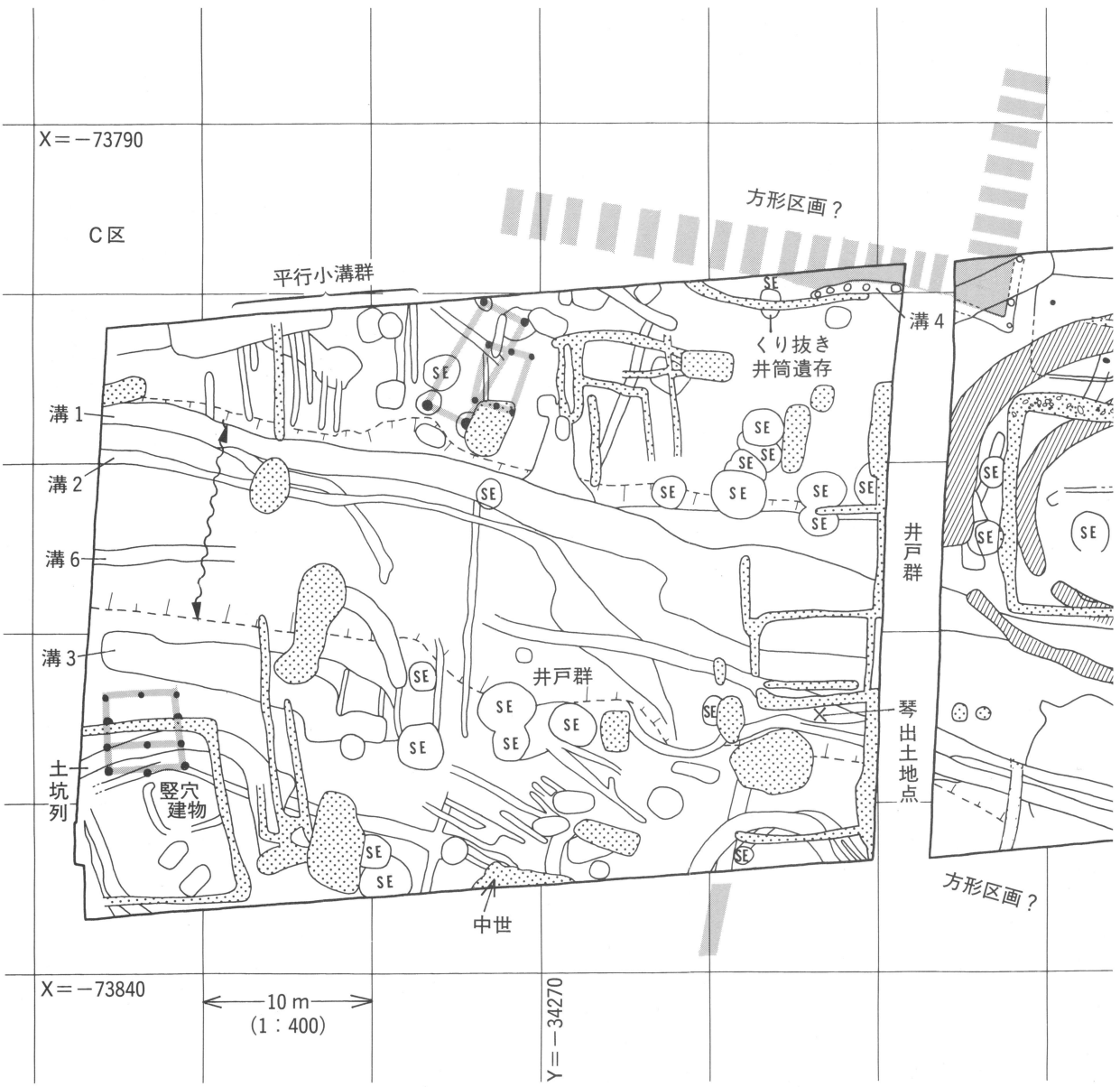
▲遺物出土状態
弥生時代中期初頭
◀土坑

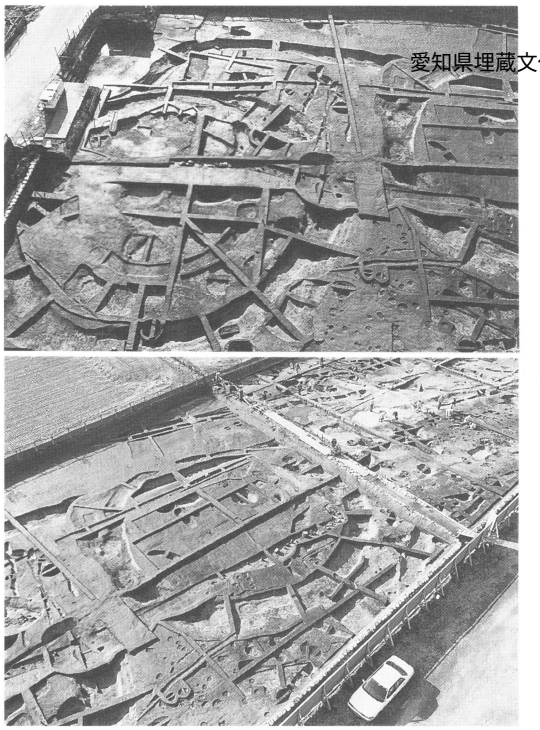


C区西半部



C区中央部井戸群

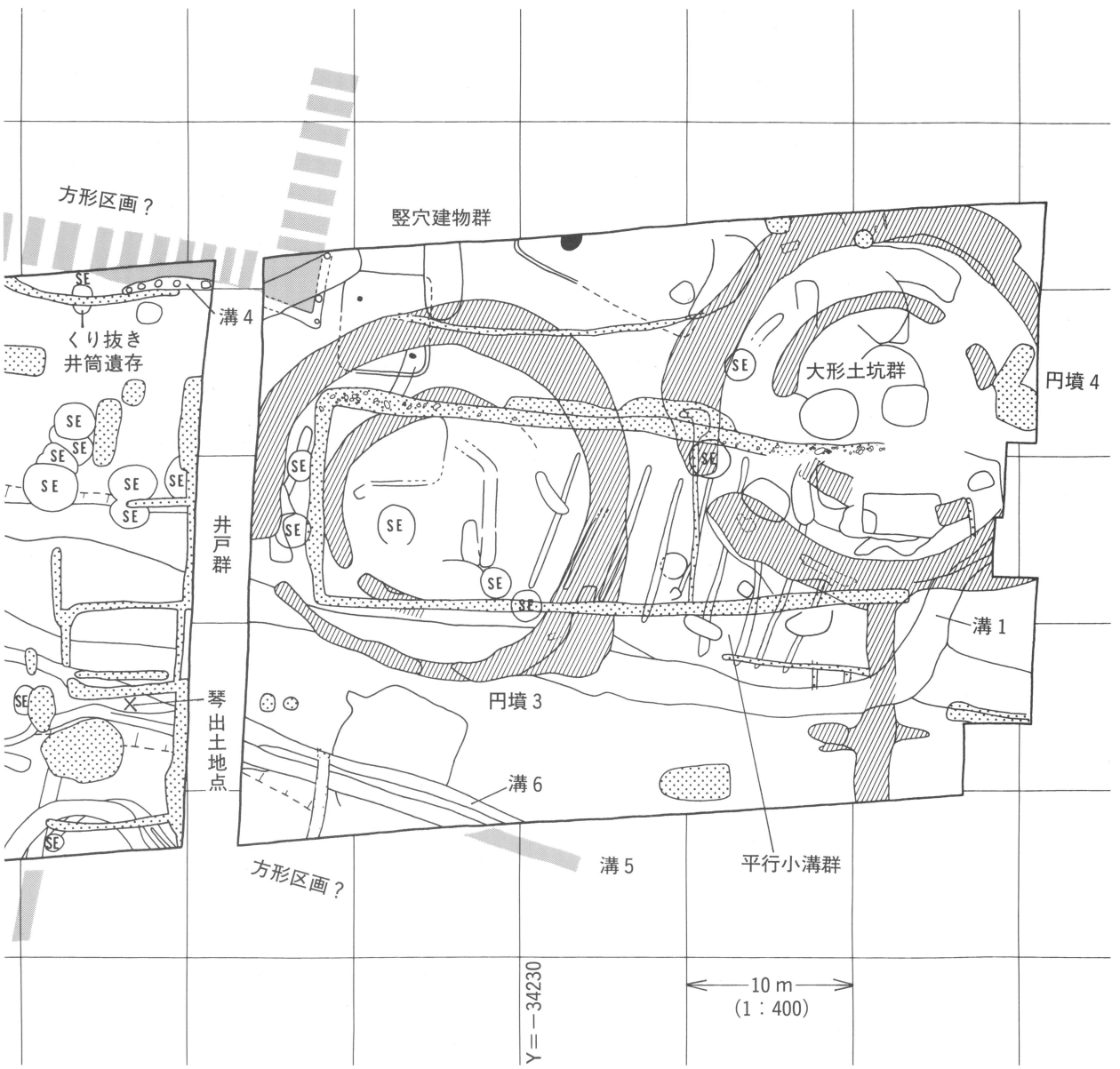


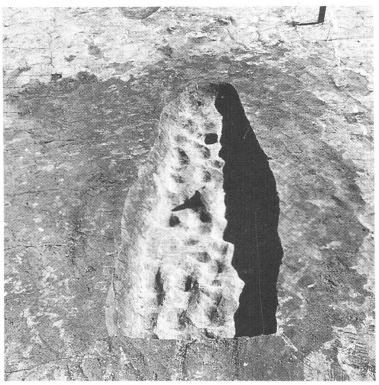


上：円墳4　下：円墳3



C区全景




円墳３周溝加工面

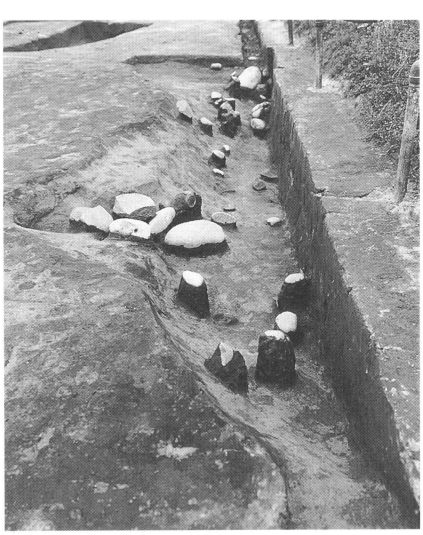
須恵器甕片が出土した。また土坑状になった東柱穴では、下部から須恵器杯身が出土した。北微高地では他に井戸が２基検出されている。南微高地でもほぼ同時期の井戸が検出されている。なお溝６からは板作りの琴が１点出土している。

Ｃ区東半部では円墳の周溝が２基検出され、円墳３は５世紀末、円墳４は６世紀前半と推定される。どちらも直径は約18ｍほどで、西南西で周溝が切れて陸橋部をつくっている。また両者ともに周溝の内側に、連続はしないが直径約10ｍの同心円状に掘削された不規則な溝または土坑が存在している。これも外側の周溝と同様の位置に陸橋部が設けられている。調査状況では、陸橋部側の溝が明瞭で、そこから離れるにしたがい浅く不規則になっている。この同心円の２条の溝に時期差があるのかどうかであるが、内側の溝が人為的に埋め立てられた状況は認められなかった。ただ、遺物のほとんどは外側の溝から出土しており、拡張と考えるよりは、主丘裾に巡らされた溝と考えるのが妥当であろうか。

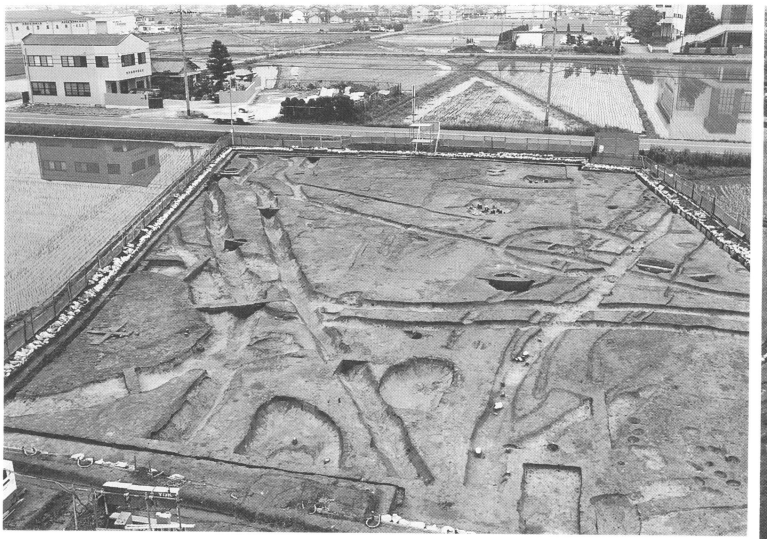
周溝からは各種須恵器が出土しているが、とくに円墳４からはフォーク状を呈する一木四又鋤の他に板材や柱材様のものがいくつか出土し、板材については溝内埋葬に関係するものがありそうである。この点に関係して、円墳４北部の周溝内部から長方形土坑が複数検出された。板材を伴うものもあり、溝内埋葬が存在した可能性がある。

ところで、Ａ区も含めてこれら円墳周溝の底面が加工面と調整面に分かれていることが確認された。加工面は、周溝掘削面であり、写真に見るように凹凸が著しい。調整面は掘削土を全て排出しないで底面を均した結果形成された面であり、見た目には斑状を呈している。凹凸のある加工面をさらに削り込んで均すことなく、残った土を均して仕上げている。

中世の遺構には、Ｃ区東半部で検出された長方形プランの区画溝の他にいくつかの溝や土坑がある。長方形区画溝内部からは円礫が出土し、とくに円墳４に重複する部分では大きな円礫が出土したが、これらが円墳４の内部主体と関係があるのかどうか明確ではない。この長方形の溝で囲まれた部分には南北方向に直交する小溝があり、またＣ区中央部や西部でも方形に巡る溝がいくつか検出されている。礫の投棄された自然埋没の大形土坑も含めてこれらは畠に関係するのであろうか。そして、斑状埋土を有する規格的な方形土坑群はこれら溝の一部を切っており、中世後半には墓域への移行があったようである。


Ｃ区：大型土坑と集石

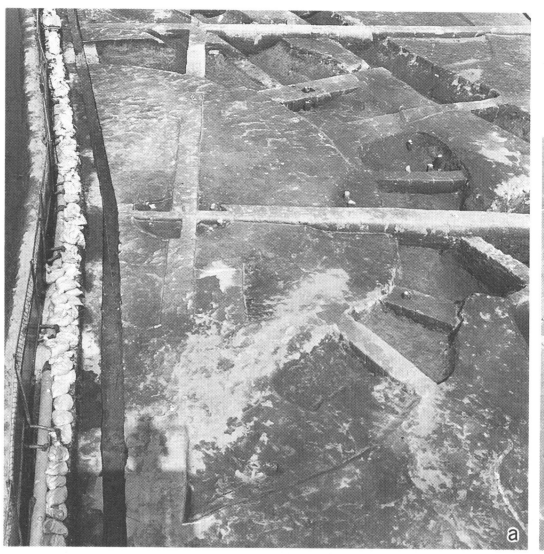
（石黒立人・栗林典昭・秋田幸純）



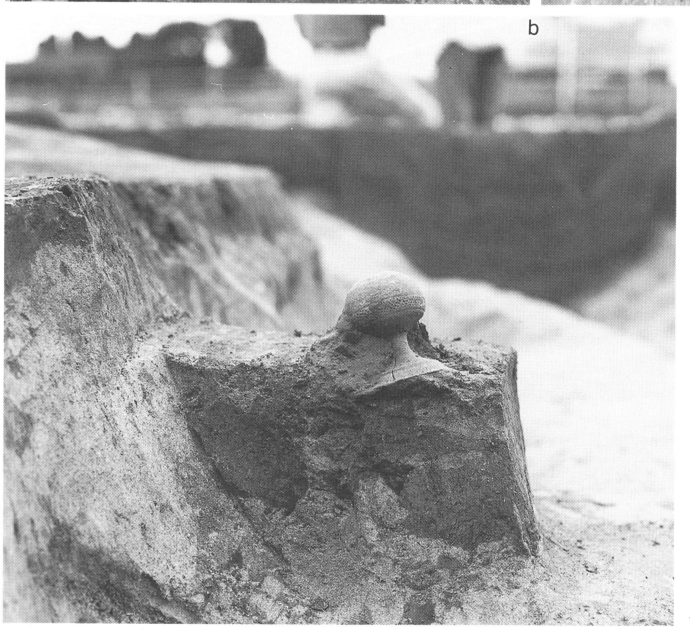
A区全景



A区とB・C区遠景



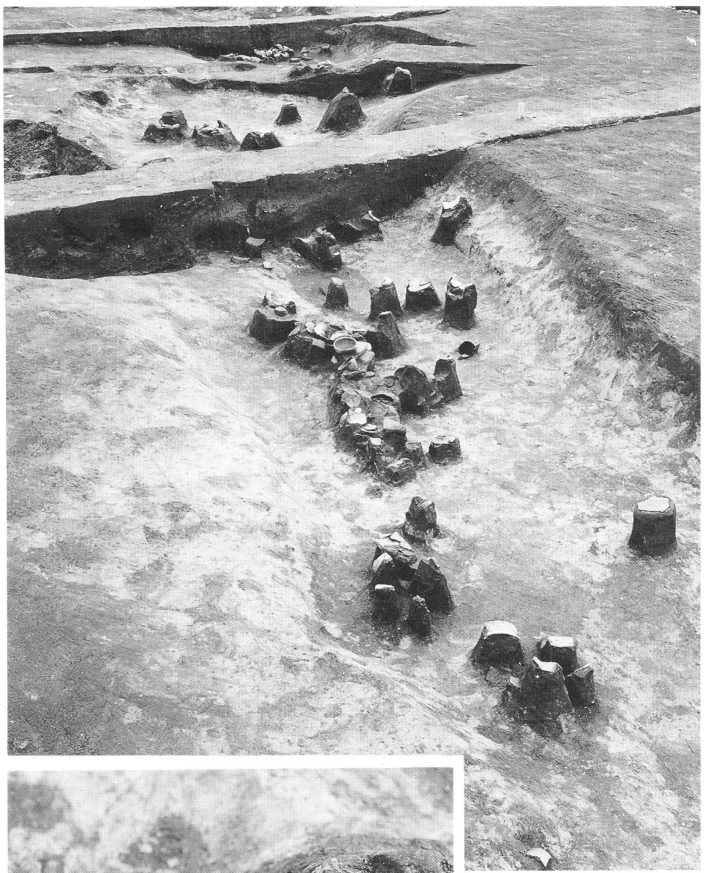




a 円墳Ⅰ遺物出土状態
b 円墳Ⅰ陸橋部付近の遺物
c 円墳Ⅰ聴出土状態

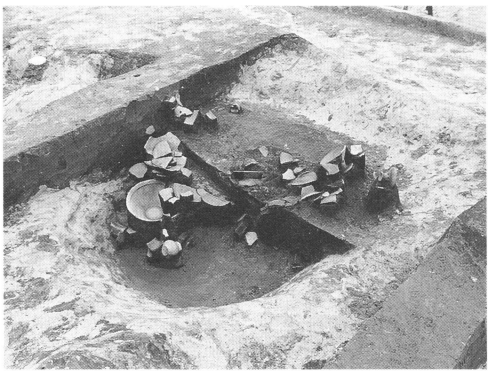


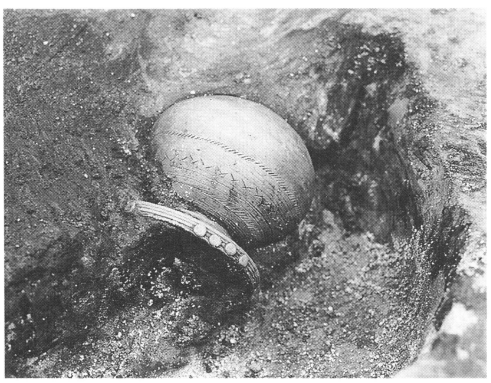
A区：大型土坑と集石



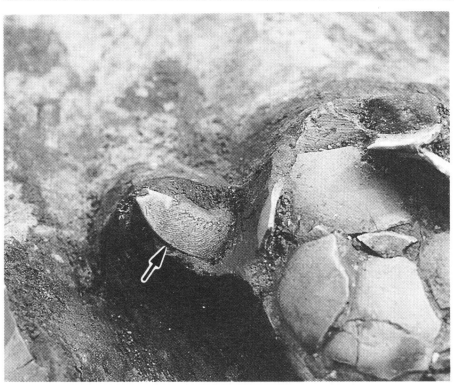
溝3遺物出土状態

井戸上層の遺物出土状態

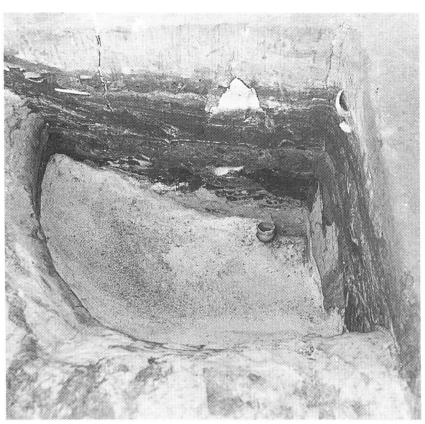


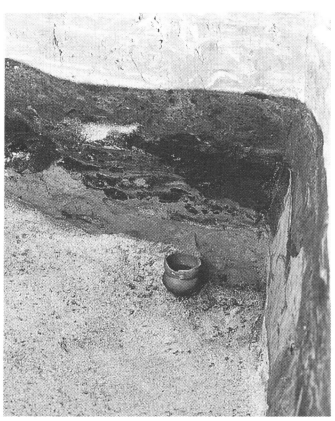


パレス壺



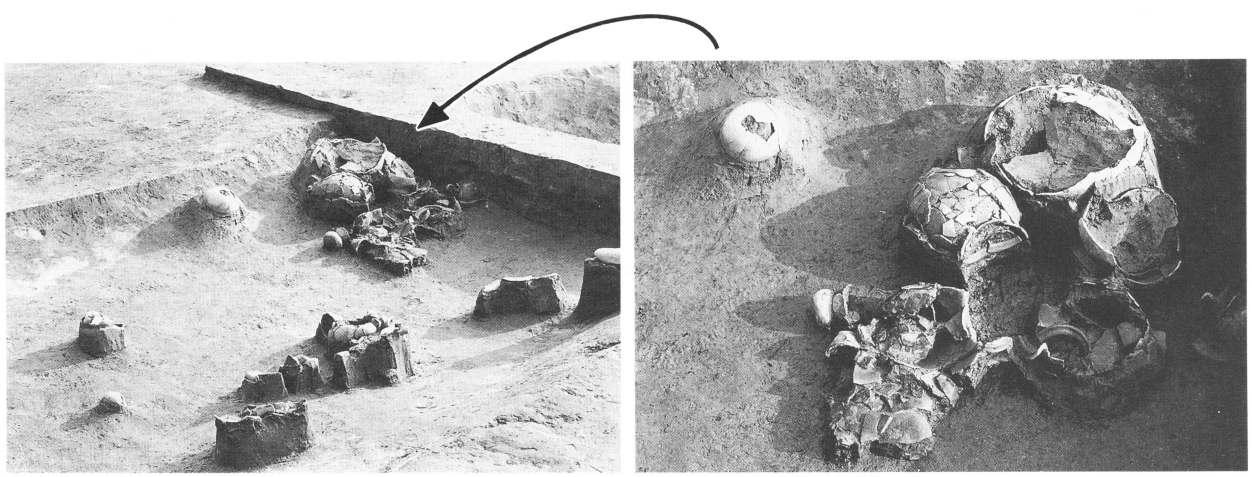
縄紋が施された壺片



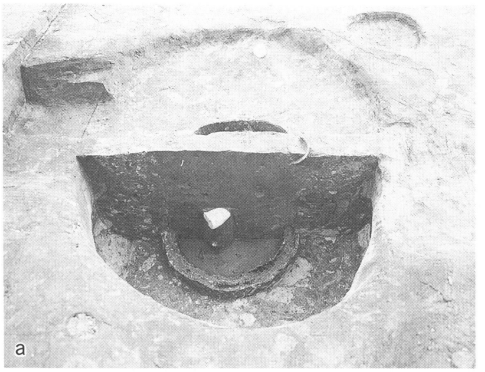


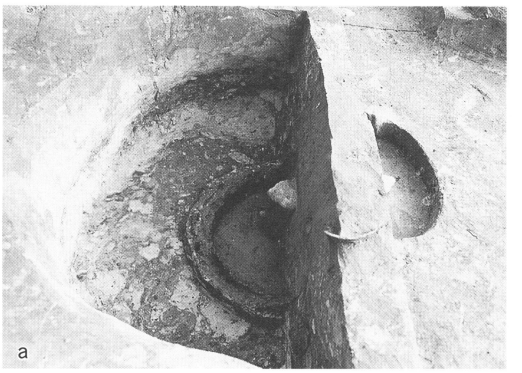
井戸の断面と小形鉢出土状態

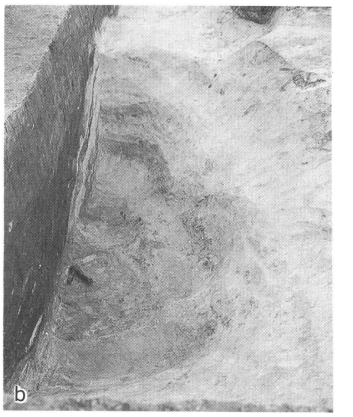
C区

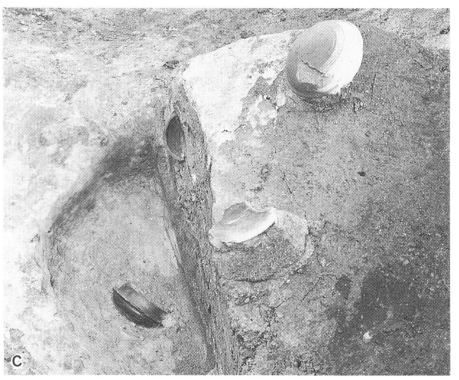


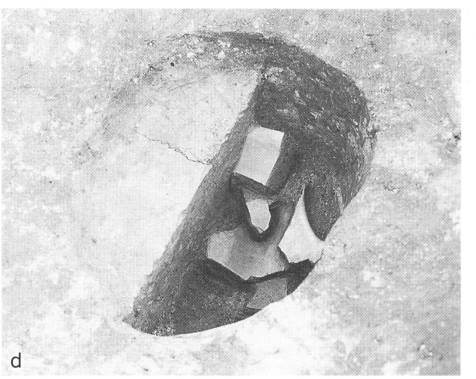
溝Ⅰ上層の遺物出土状態



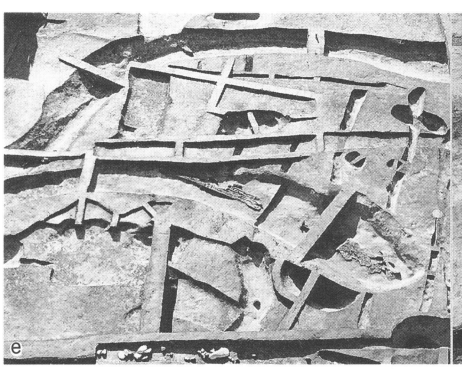






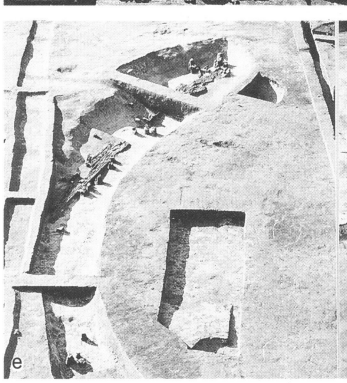


a　くりぬきの井筒をもつ井戸
b　大形土抗下部出土の鍬柄
c　柱穴内遺物出土状態
d　柱穴内遺物出土状態
e　円墳4遺物出土状態
f　円墳3遺物出土状態
g　溝6琴出土状態と琴細部

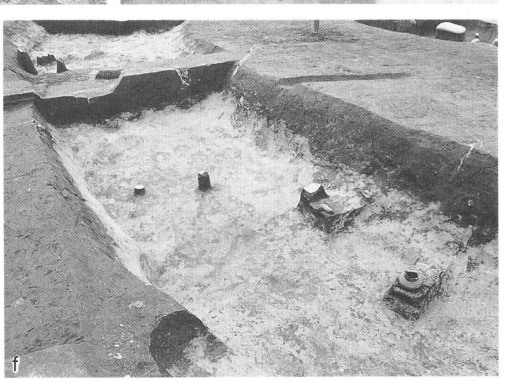




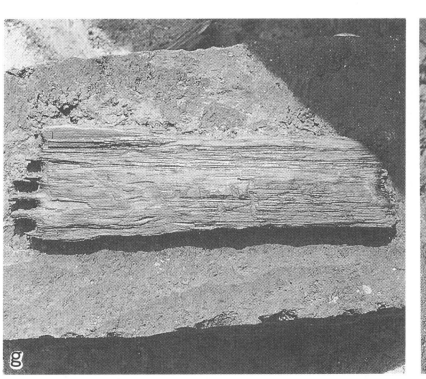


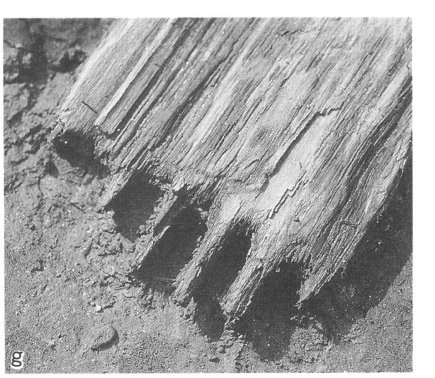












田 所 遺 跡

調査の経過　田所遺跡は、尾張北部の一宮市大字田所・光明寺及び葉栗郡木曽川町大字黒田にかけて位置し、木曽川の形成した標高８ｍ前後の自然堤防及び後背湿地に分布している。

本遺跡は、平成４年度以来東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会をとおして委託され、本センターが調査を実施した。今年度は６月～８月にＡ区（800㎡）、８月～11月にＢ区（3200㎡）、Ｂ区と同時進行で11月Ｃ区（500㎡）の計4500㎡を発掘調査した。その結果予定調査面積の９割が完了したこととなった。（高橋信明）

調査の概要

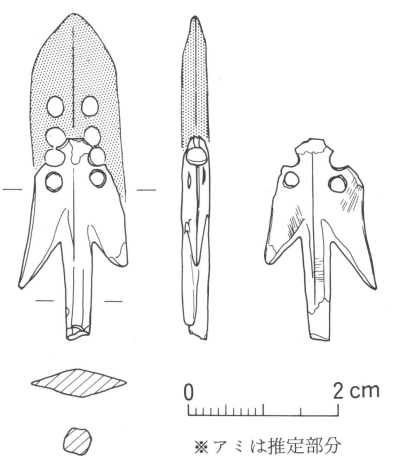
Ａ　区　Ａａ区は93Ｉ区の北側に位置した道路部分で、現水田の床土下の黒褐色土層で遺構の検出を行い溝、土坑、井戸を検出した。遺構内からは13世紀～14世紀にかけての遺物が出土。調査区中央から昨年までの調査により確認された南北に走る大溝の続きを検出した。

Ａｂ区は93Ｊ区の北側に位置し、溝、土坑を検出した。出土遺物は13世紀～14世紀にかけての遺物がその主体を占め、他に鳥鈕蓋付平瓶の尾の破片や調査区中央トレンチの湿地性堆積土より縄紋晩期の擦痕土器片が出土。

Ｂ　区　Ｂ区はＢａ・Ｂｂ区がある。Ｂａ区の北西部分が92Ｅ区の南側と接している。

Ｂａ区は調査区の西側半分、Ｂｂ区は調査区の東半分である。南北に走る溝、土坑、柱穴を検出した。出土遺物のほとんどが13世紀～14世紀にかけての遺物である。92Ｅ区の東側から屈曲し東に走ると推定されていた大溝の位置から、遺構検出面を突き破った噴砂の砂層が認められたのみで大溝はなかった。

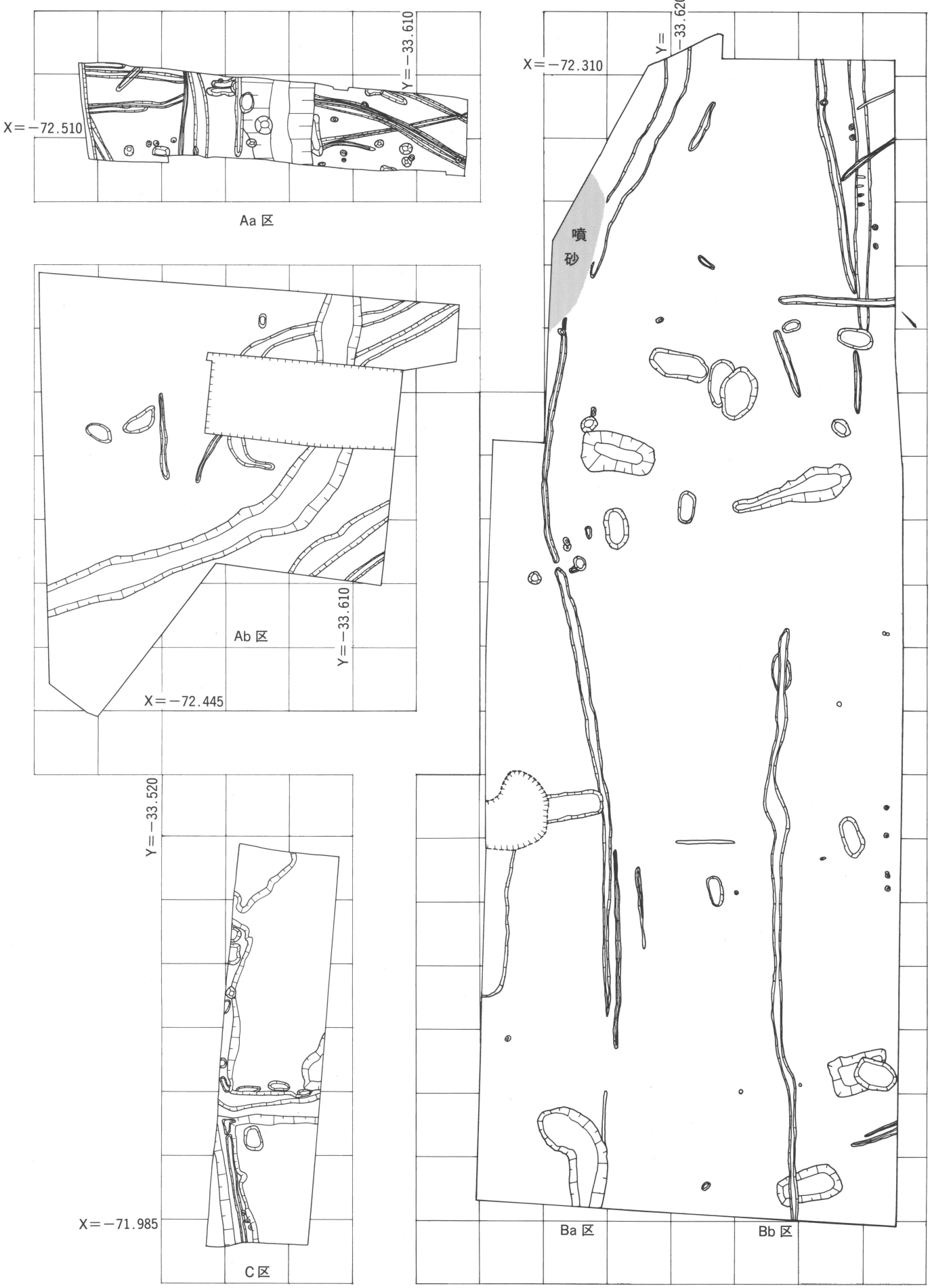
Ｂａ区北西側の溝から灰釉系陶器片に混じり上半部が欠損した、右図の多孔銅鏃が出土。（小澤一弘）



第１図　Ｂａ区出土遺物

Ｃ　区　本調査区は、昨年度の田所遺跡94Ａ区の北東部に接する。昨年度の調査所見から最も保存状態の良好な区と考えていた。しかし、古墳前期の遺構・遺物は西壁よりでわずかに確認できたにすぎない。遺構としては、中世に掘削された南北２つの凹地を検出したに留まった。凹地を区画する東西の高まりは土手状で道の機能も考えられる。遺物は灰釉系陶器片が圧倒的に目立つが、右の拓本は、古墳前期の壺に描かれた絵画土器片である。船と頭部に飾り付けした人物を表現したモチーフであろうか。（高橋信明）


第２図　Ｃ区出土遺物拓影（１：２）



第 3 図　A 区～ C 区遺構全体図

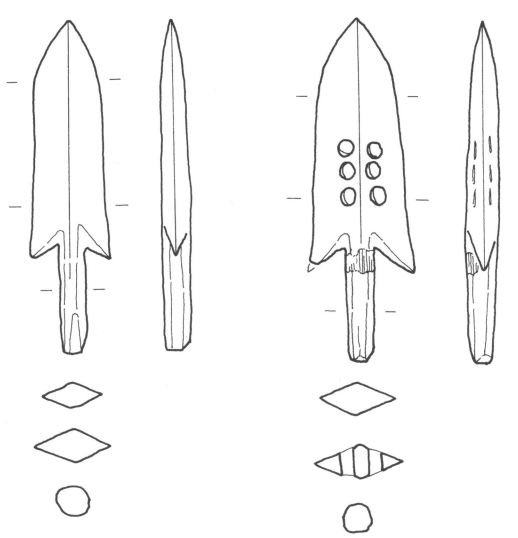
西 上 免 遺 跡

調査の経緯　尾西市開明に所在する西上免遺跡は、平成２年度から調査を継続的に実施している。本年度は東海北陸自動車道建設予定地内において、平成６年(1994) ９月から平成７年(1995) ３月まで4700㎡を対象にＡ・Ｂの２つの調査区を設定して発掘調査を実施した。

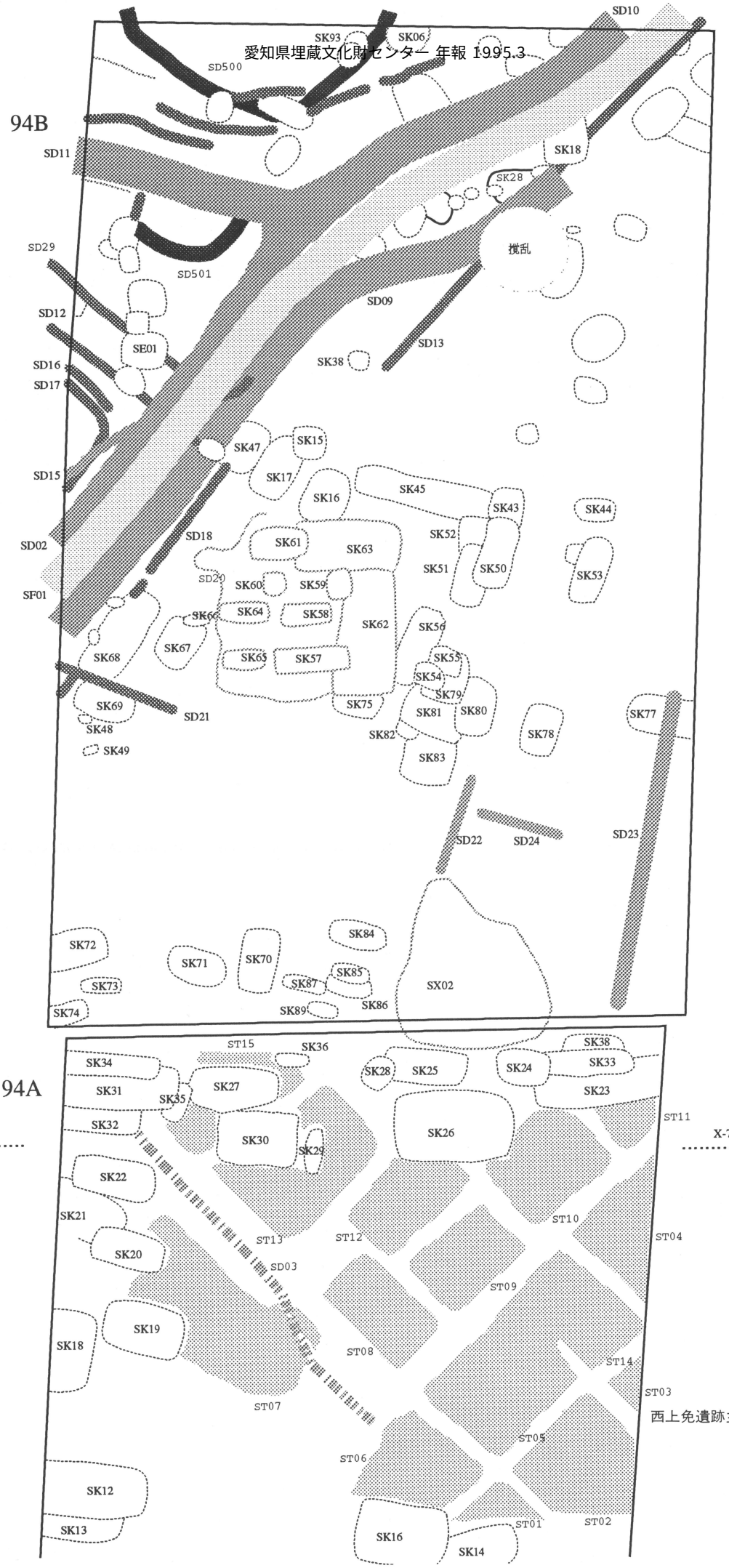
調査の概要　Ｂ区北西側では西上免遺跡の主要遺跡群が展開する微高地を確認することができた。

検出できた主要遺構は、時期的に４つに大きく区分して考えることができる。まず弥生時代中期を中心とする遺構で、微高地縁部に土坑群が数基存在し、石斧・石鏃類も散在する。次に古墳時代初頭のもので、微高地上にはＳＤ500・ＳＤ501のような墳丘墓（廻間II式期）が展開し、さらにＡ区北側には水田（廻間Ｉ～II式期）の存在を確認することができた。さらに特筆できる遺物としては銅鏃２点がある。その内１点は多孔銅鏃で、微高地南端部で発見することができた。さてもっとも多くの遺構が所属するのが鎌倉時代を中心にする時期で、微高地縁部に掘削された溝ＳＤ09や小溝群と土壙群で構成される。これらは微高地に方向性を合わせるように配置されたものが多い。特に中世の方形土壙は、約80基近く検出でき、規模・方向性・場所等の要素によって時期的な変遷を推測できる。最後に室町時代末期を中心にした時期のもので、微高地端部に掘削された溝ＳＤ10・ＳＤ11・ＳＤ02やＢ区中央部に展開する大型土壙群（ＳＫ62・63ほか)、不定形な大型土坑ＳＸ02が所属する。

今回の調査によって微高地の南端部の状況が明らかになり、微高地付近に展開する鎌倉時代の集落域と古墳時代では墳丘墓を中心とする墓域と水田域の存在を明らかにすることができた。　（赤塚次郎）



西上免遺跡出土銅鏃（１／１）



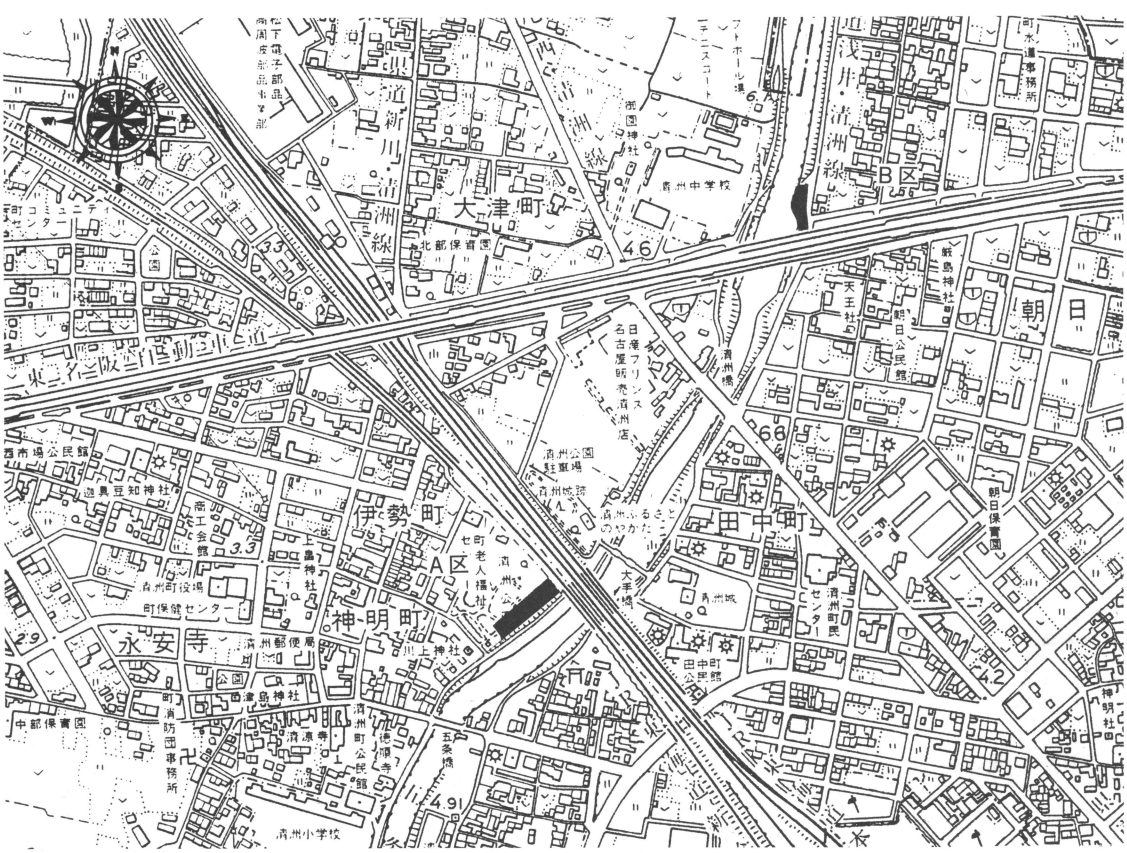
西上免遺跡主要遺構配置図

1 : 300

清洲城下町遺跡

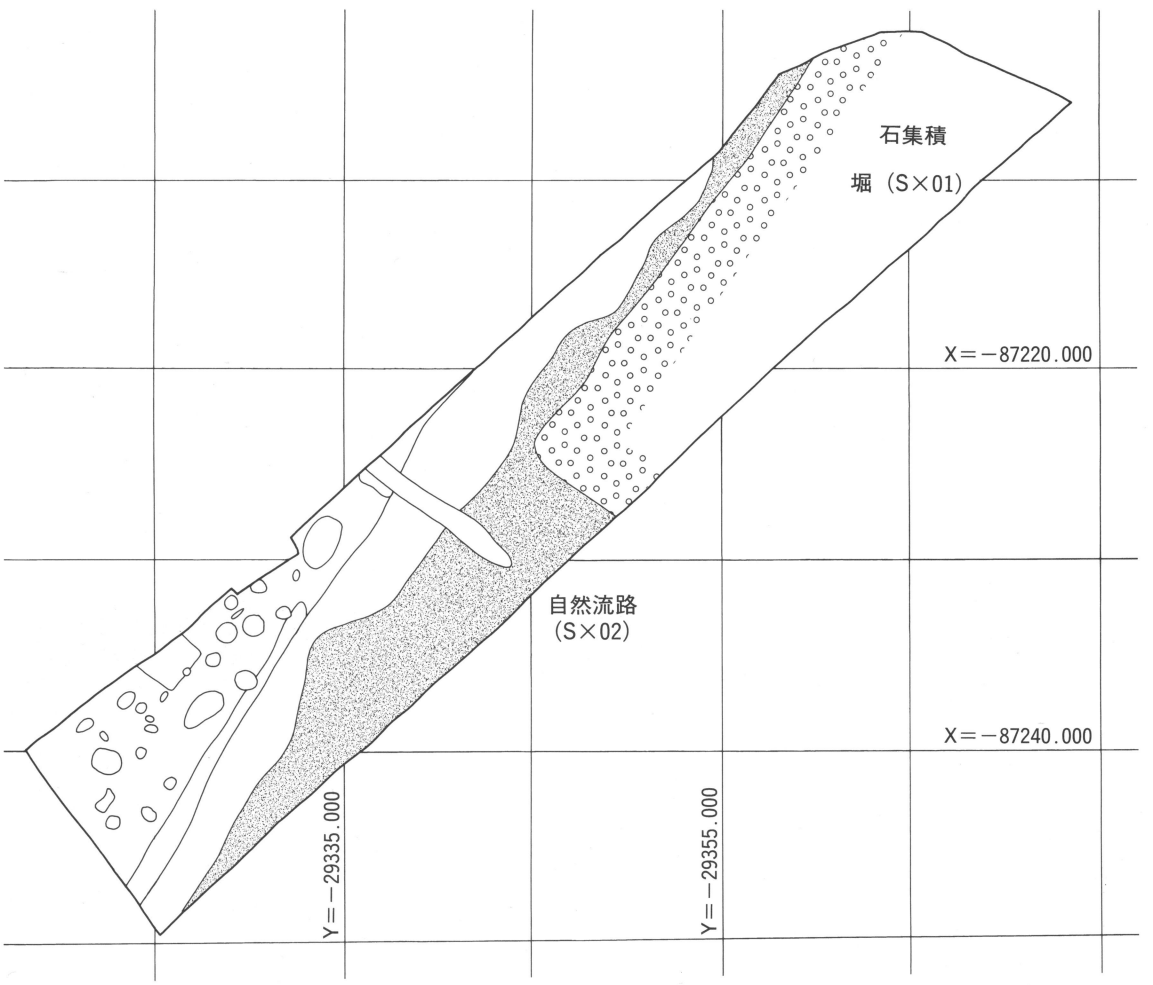
調査の経緯　清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する。本遺跡は、濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は五条川改修に伴い1500㎡（A区1200㎡、B区300㎡）の調査を、平成６年10月から平成７年３月までの予定で実施した。

調査の概要　A区は、五条川右岸の清洲公園東端に位置する。この地点は清須城の本丸推定地にあたり、昨年度の調査地点C区の北東に隣接する。調査成果のうち、特筆すべきは清須城の堀の肩と考えられる石積の遺構（ＳＸ０１）が検出されたことであろう。この遺構は『清須村古城絵図』（名古屋市蓬左文庫蔵）にも描かれている本丸東側の内堀と考えられる。石垣の裏込めとして使用された石（こぶし大）の集積は、廃城時に石垣の巨石を抜き取ると同時に崩れ、さらに建物から崩落した多量の瓦がそれに混じって出土している。また石垣最下段の巨石が抜き取られずに数カ所残存している。堀については過去の調査（63C区、89E区）でも中堀の一部が検出され、部分的に石垣と敷石が確認されており、その成果との比較検討も今後の課題となろう。出土遺物はその大半が瓦であり、軒瓦（金箔瓦を含む）、平瓦、丸瓦、道具瓦、飾瓦（金箔瓦を含む）、鯱瓦など種類、量とも非常に豊富である。特



第１図　調査区位置図（1：10000）

に完形の瓦が多く出土したことは瓦の研究により多くの情報をもたらすであろう。なお土師器皿を主体として大窯Ⅰ～Ⅱ期に所属する遺物を出土したＳＸ０２は自然流路の可能性が高く、埋土の状況からごく短期間に埋められたことがわかる。堀を築く際の大規模な土木作業を想像させるとともに、五条川右岸における城下町前期の様子を知るうえで貴重な資料を得ることができた。　　（福岡晃彦、神谷知幸、蟹江吉弘）



第２図　Ａ区主要遺構配置図（Ｉ：400）



Ａ区全景　南西から



Ａ区ＳＸ01　内堀コーナー部分上面　東から

正楽寺跡・儀長城跡・儀長寺通遺跡

立地と環境　正楽寺跡・儀長城跡・儀長寺通遺跡は三宅川により形成された自然堤防上に所在する。地籍は稲沢市儀長町で、標高は約2.5mをはかる。遺跡の周辺には、西方に弥生時代中期末の集落遺跡である一色青海遺跡が所在する。また、三宅川の対岸には尾張国分寺、さらにその北西には国分尼寺、北東には尾張国府など古代尾張地域の行政的な中心部も隣接している。

本遺跡は、その名称にも使用されているように、古代には『正楽寺』、中世には『儀長城』が存在したと伝承をもつ遺跡となる。前者の正楽寺は、尾張国分寺の四至に設定された四楽寺の一つで、尾張国分寺から西方へ0.6～1.0kmの距離を有する。後者の儀長城は片原一色城の支城として、在地勢力である『橋本伊賀守』の一族または家臣が居住していたとされている。なお、儀長城は、橋本一族の本城である片原一色城からは南東2.0kmに位置する。

今回の調査は、県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、昨年度からの継続事業として実施している。本年度の調査は総面積5170㎡で、これをA区～D区の4地区に分割して実施した。それぞれの面積は、A区（732㎡）、B区（1314㎡）、C区（1492㎡）、D区（1632㎡）となる。調査期間は9月～3月である。

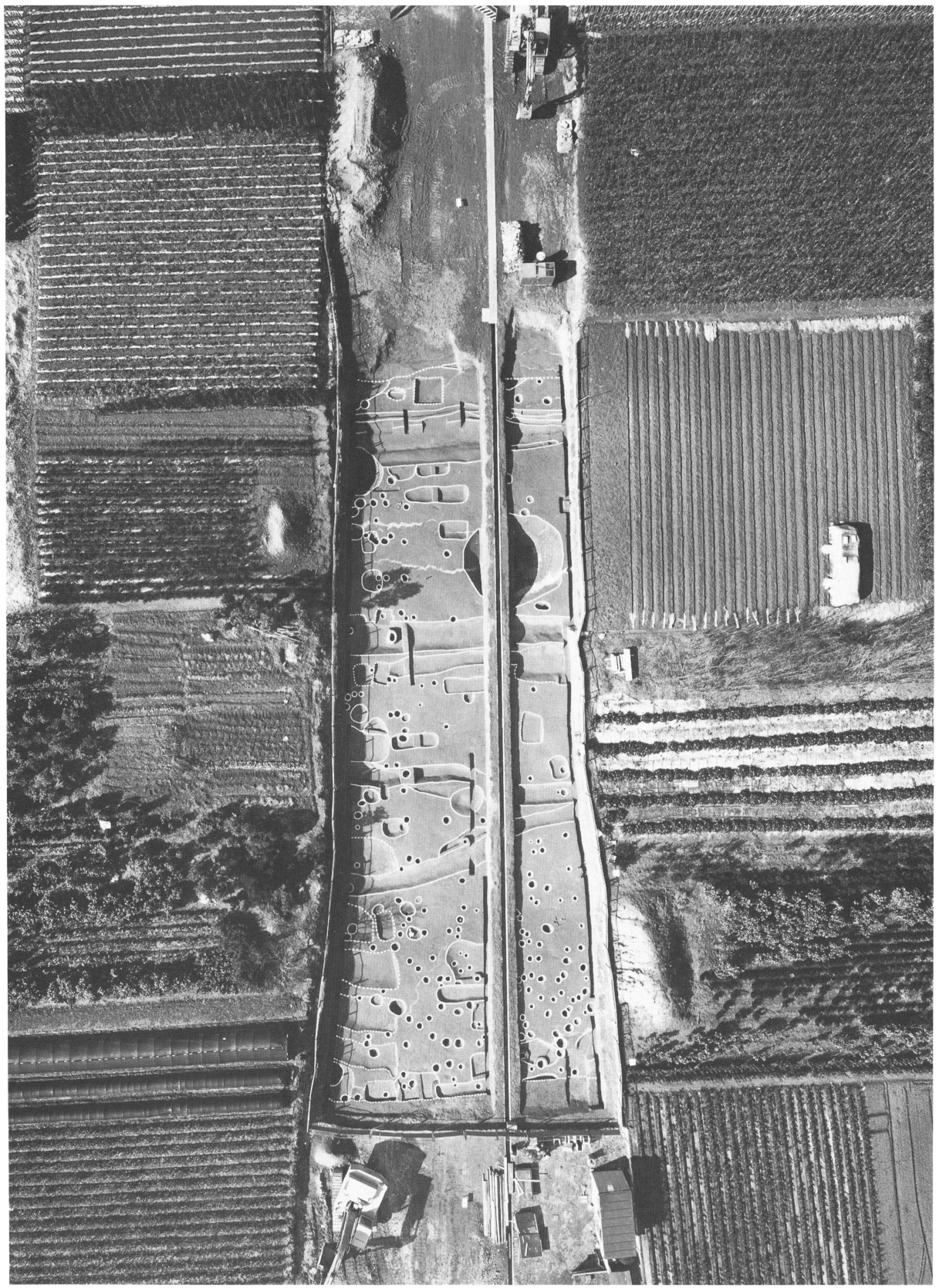
遺構　今回検出できた遺構は、竪穴住居、堀立柱建物、柵、土坑、溝などがある。遺構の分布状況はA区が濃密で、西側ほど希薄となる。次にこれを時期別に整理すると、古墳時代後期と奈良・平安時代、鎌倉時代、江戸時代にまとまりをみることができる。まず、古墳時代後期の遺構は、竪穴住居、土坑、溝が検出されている。遺構の分布範囲は、A・B区で濃密、C・D区で希薄となる。土坑のなかには掘立柱建物の柱穴の可能性をもつものも存在しており、居住域と考えられる。次に奈良・平安時代の遺構であるが、検出できた遺構は乏しく、土坑が数基検出されているにとどまる。この時期は、遺跡の名称にもなっている『正楽寺』に関わるが、その内容は判然とはしない。また、鎌倉・室町時代の遺構は、堀立柱建物・井戸・土坑・溝で構成される遺構群となる。全面に溝による方格地割が設定され、調査区には屋敷地が構成される。江戸時代の遺構は、C期の地割りを継承する形で、数条の溝が確認されている。このほかC区では幅5mを前後の溝が、前者の溝を破壊する状況で3条確認されているが、他の遺構と方位や規模が異なることから、その性格は今後の課題となる。

まとめ　本年度の調査は、鎌倉・室町時代の屋敷地が代表的な遺構となる。しかし調査面積の関係から、その構造にまで論究できる資料を得てはいない。なお、遺跡の名称となっている「正楽寺」や「儀長城」は、その実体を確認することができなかった。

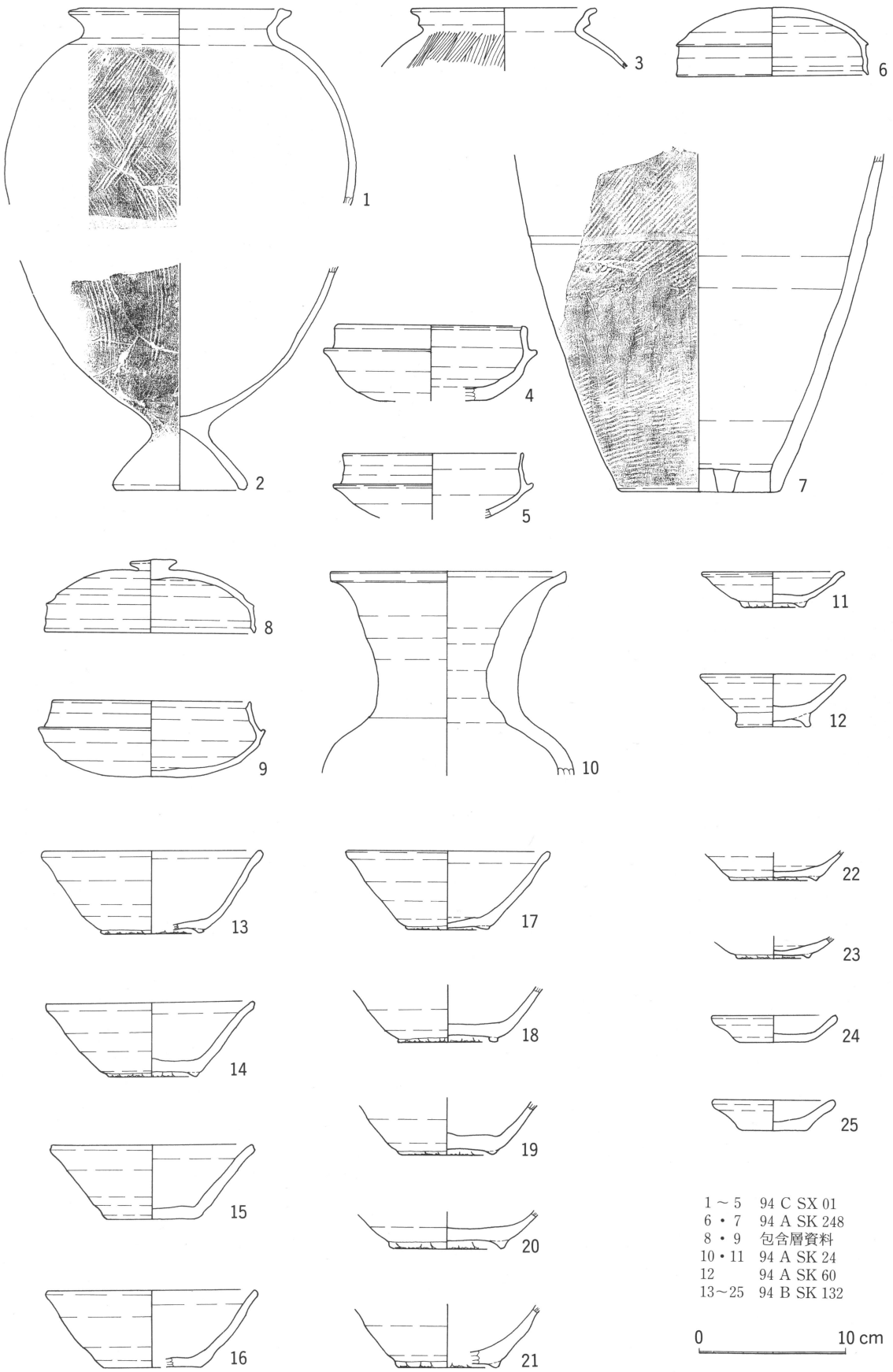
（池本正明）



調査区位置図（1：2500）



A 区全景


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
1～5　94 C SX 01
6・7　94 A SK 248
8・9　包含層資料
10・11　94 A SK 24
12　94 A SK 60
13～25　94 B SK 132
0
10 cm

一 色 青 海 遺 跡

調査経過　一色青海遺跡は中島郡平和町須ケ谷および稲沢市儀長町に所在する。遺跡及びその周辺は、三宅川により形成された標高１ｍ前後の自然堤防と、その後背湿地に該当する。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設に伴う事前調査として、昨年度からの継続事業として実施している。本年度の調査は総面積3908㎡で、これを94Ａ区～Ｆ区の６地区から分割して実施した。それぞれの面積は、94Ａ区（736㎡）、94Ｂ区（1088㎡）、94Ｃ区（1486㎡）、94Ｄ区（214㎡）、94Ｅ区（192㎡）、94Ｆ区（192㎡）となるが、具体的な作業は、排土などの関係からこれらをさらに13地区に細分して実施している。なお、調査期間は４月～８月と、12月をこれに充てている。

調査概要　調査の結果、検出できた遺構は、弥生時代中期末と鎌倉・室町時代と江戸時代の三時期にまとまりをみることができる。ここでは弥生時代中期末の遺構をＡ期、鎌倉・室町時代Ｂ期、江戸時代をＣ期と呼称する。以下、調査区毎に概観する。

94Ａ区　94Ａ区は93Ｅ区を挟んだ細長い調査区である。93Ｅ区の東側に所在する94Ａａ・94Ａｂ区、西側に所在する94Ａｄ・94Ａｅ区に区分する。確認できた遺構はＡ期とＢ期に帰属する。まずＡ期の遺構であるが、94Ａａ・94Ａｂ区では、Ａ期の土坑、溝などを多数検出している。作業開始当初は93Ｄ区で確認できた谷地形が、遺構遺物とも希薄となっていたことを考え、ここが遺跡の限界部分に該当することを予想していたが、遺構はさらに東側にも分布していることが確実と考えられる。また、94Ａｅ区ではＡ期の土坑を中心とした遺構が集中している。調査区の制約から、建物などの検出はできなかったが、居住域としての性格を考えることができる。次にＢ期の遺構は全体に希薄となるが、94Ａｄ区で方形土坑の集中域を確認している。

94Ｂ区　94Ｂ区は今回最も西側に所在する調査区である。確認できた遺構はＡ期とＣ期に帰属する。まずＡ期の遺構であるが、竪穴住居を１棟確認している。平面形は隅丸方形を呈するが、後述するＣ期の溝に東側と南側を破壊されている。埋土からは多数の弥生土器が出土している。94Ａｅ区の成果も考慮すると、94Ｂ区は、Ａ期の居住域の西端部分と考えられる。次に、Ｃ期の遺構は、溝を１条確認している。この溝は比較的大規模な遺構で、94Ｂｂ区を斜方向に走行し、幅５ｍ、検出面からの深さは0.4ｍをはかる。

Ｃ～Ｆ区　Ｃ～Ｆ区はいずれも93Ｃ区の周囲に接して設定されているため、ここでまとめて報告する。各調査区の位置は94Ｃ区が93Ｃ区の北側、94Ｄ区が南側、94Ｅ区が東側に位置し、94Ｆ区は93Ｃａ区と93Ｃｂ区に挟まれる位置に該当する。ここではＡ期とＢ期に帰属する遺構を確認したが、いずれも93Ｃ区の様相とよく一致している。今回検出したＡ期の遺構は、平面形が円形ないし楕円形で、検出面からの深さが0.5m程度をはかる土坑に代表される。このうちいくつかは埋土から炭化物に混在して土器片が多数出土している。また、この炭化物には植物種子なども含まれており、これらは廃棄土坑とも推定できるのかもしれない。



第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：5000）

次にＢ期の遺構は、方形土坑を検出している。方形土坑は93Ｃ区で「方形区画」と「集中区」を形成していたが、これらの分布の状況などの特色は、昨年度の成果とよく整合する。このうち集中区は新たに94Ｄｃ区の東側や94Ｆ区に確認できた。

まとめ　本年度調査区は、昨年度調査区の周辺部分に設定された関係上、昨年度の成果と概ね一致をみた。

今回検出できた遺構は、弥生時代中期末の溝・土坑や、鎌倉・室町時代の方形土坑、江戸時代の溝などがある。なお、弥生時代中期末の遺構は、Ａ区の西側部分で、柱穴の可能性をもつ小土坑や廃棄土坑が集中する傾向が確認でき、居住域となる可能性が強い。ただし、Ａ区が幅２ｍ～５ｍの細長い形状である関係上、遺構の性格・形状などの把握は困難となる。以下、時期別にこれをまとめる。

Ａ期　Ａ区では、調査区の形状から建物の検出はできなかったが、居住域としての性格を考えることができる。平成三年度に調査が実施された一色長畑遺跡を含んだ範囲を、Ａ期の居住域として理解することが妥当であると考えらえる。ただし、比較的まとまった面積に及ぶＢ区では竪穴住居が１棟のみの検出にとどまることから、今回の調査区はその外縁部分であることが考えられる。

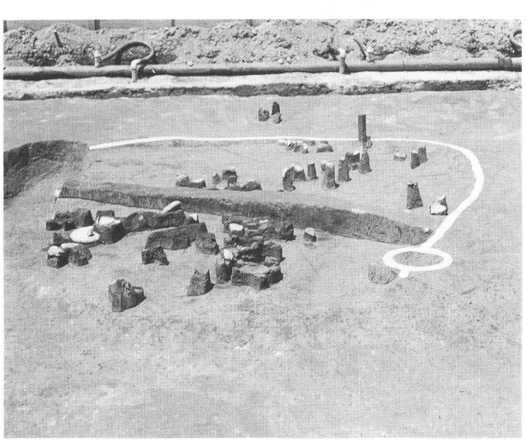
Ｂ期　Ｂ期の遺構は、各調査区を通じて方形土坑を検出している。遺構分布の調査区に限定して考えると、北側部分に希薄で、南側部分に群集している。方形土坑が集中する南側部分では、これらが方形区画や集中区を形成するほか、分布の濃淡も確認できる。

Ｃ期　Ｃ期の遺構は明瞭なものとしてＢｂ区で溝が１条確認できたに過ぎない。また、そのほかの遺構が散発的で、これらを遺構群として把握できるものではない。一色青海遺跡は、Ｂ期とＣ期の間に属する遺物がほとんど確認できないことから、この間遺跡が荒廃していることも考えられる。ここでは一色青海遺跡で江戸時代に再び遺構の構築が確認できることを評価し、同時代に各地で活発化する新田開発事業に関連したものである可能性を考えておく。

（池本正明）



Ｂ区全景



竪穴住居（Ｂ区）



C、D全景

鳥　羽　城　跡

調査の経過　鳥羽城跡は、幡豆郡幡豆町大字鳥羽字川坂地内にある城跡で、三ケ根山から西に延びる低丘陵の先端に位置している。平地部との比高はおよそ15mあり、三河湾も含めて周囲の様子を一望できる立地にある。また城を巡るように北へ折れる吉良街道と、海岸沿いに吉良・一色に通じる街道との分岐点にあたり、交通の要所であったことも指摘できる。

鳥羽城に関する文献史料は、18世紀に書かれた『三河国二葉松』に「鳥羽古城、在二カ所、大山蔵人、岡田十内」とあるだけで、城の位置や規模・性格・城主などについてははっきりしていない。

今回の調査は、県道西尾幡豆線の建設に伴うもので、愛知県土木部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、今年度4月から9月まで、3180㎡の面積の調査を行った。

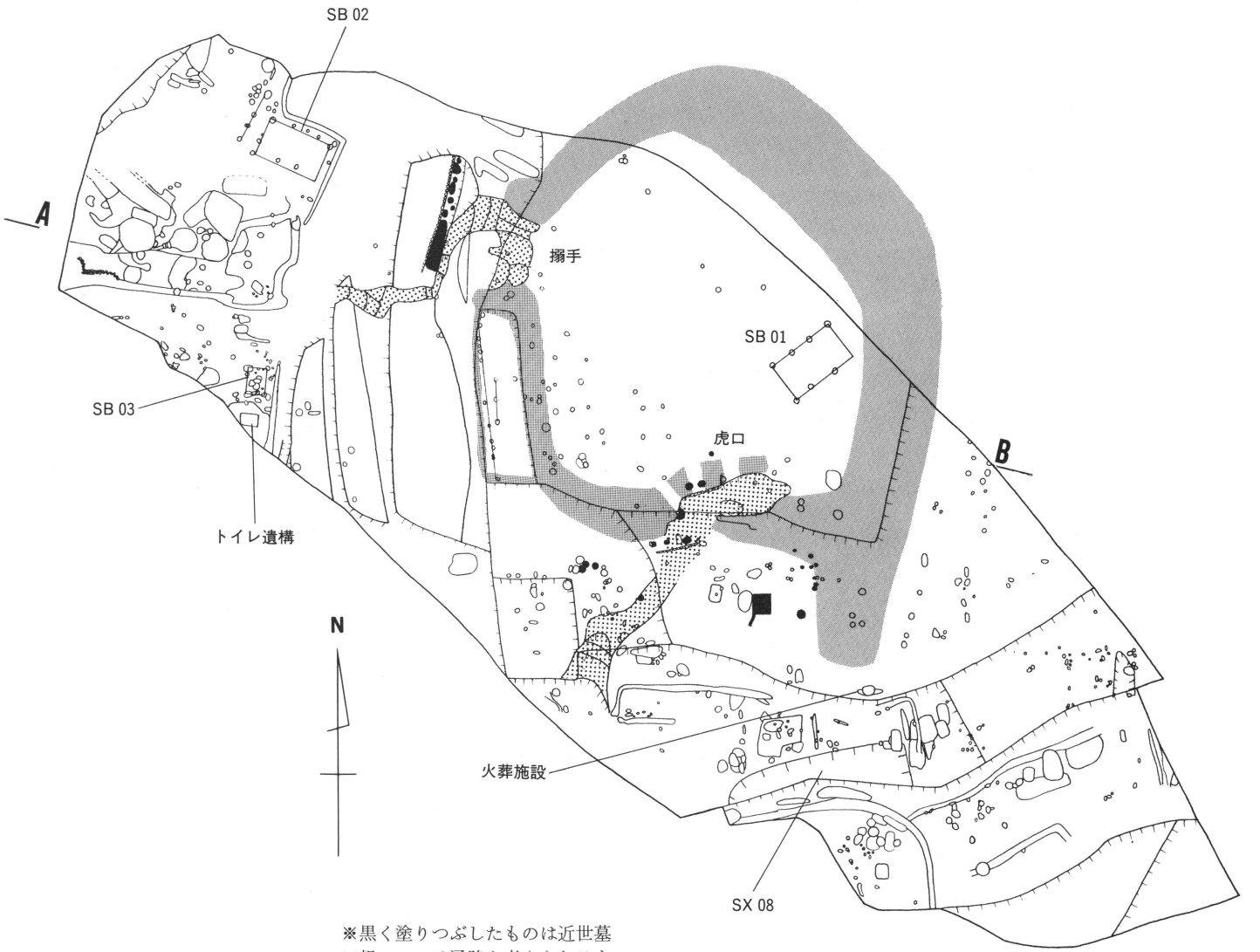
調査の概要　調査前の現地は、雑木林と竹林となっており、平坦な部分に墓石や地蔵等の石像、火葬坑などの直前まで使用されていた墓地関連の施設がみられた。ただその中に、明らかに土塁と考えられる高まりや、曲輪らしき平坦部が確認されたため、樹木の伐採後に地形測量を行った。その結果、調査区の範囲は主郭の約3/4にあたること、北東側の土塁や堀切と推定される谷地形の部分が調査対象外の部分となることが判明した。また、西側の低位部に人工的に作り出されたと思われる平坦地があり、屋敷地の可能性が考えられた。

調査は築城時の地表面と土塁の築造状態を確認しながら、高位の主郭と思われる部分から順次下位に向かって進めていった。高位の平坦部分では、地表の腐植土を取り払うと、地山である橙褐色砂層や岩盤が表れ、斜面部分に築城前の堆積と思われる灰褐色砂がわずかに堆積していた。西側の低位部は盛土で平坦になっており、近世の遺構が検出された。

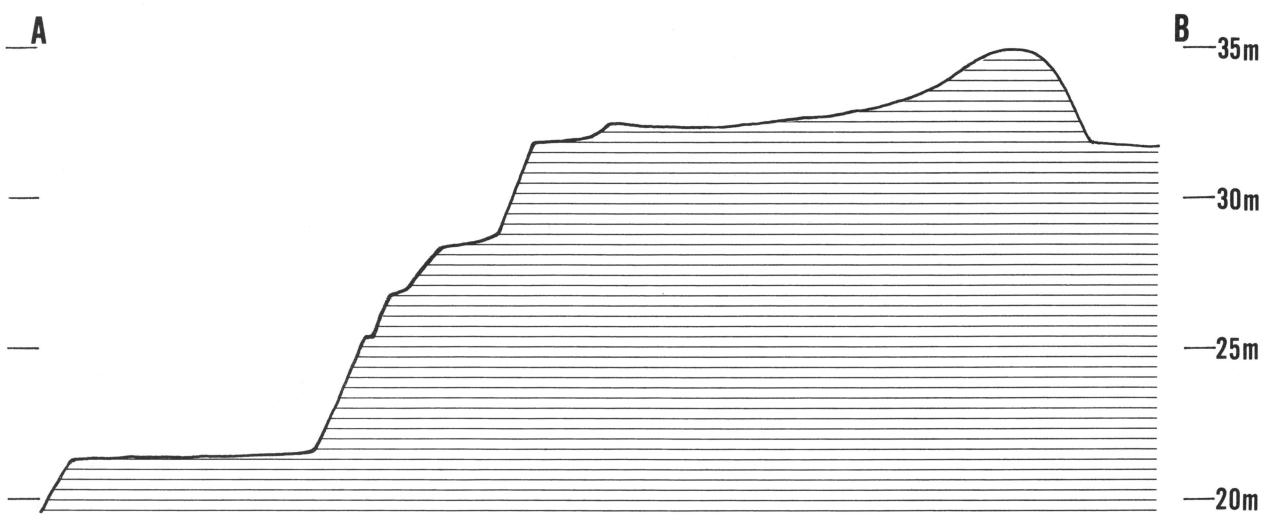
遺物については、城の所属時期を決定できるようなものは出土していない。



第1図　鳥羽川坂城（鳥羽城跡）縄張り図（約1/2000）
※石川浩治氏作成　愛知県教育委員会『愛知県中世城館跡調査報告II（西三河地区）』1994



※黒く塗りつぶしたものは近世墓
※粗いアミは通路と考えられるもの
※細かいアミは土塁と曲輪端



第 2 図　鳥羽城跡遺構図（1/500）・断面図

虎　口　最上位にある主郭の南側では、土塁を交差させて造られる喰い違い虎口が検出された。西側から延びて内側にはいる部分は削平されて確認されなかったが、東側から延びて外側になる部分は、南半が近世墓のため削平されていたが、かろうじて残存していた。この虎

搦　手　口には南西に延びていく平坦部分があり、通路と推定された。また西側の一部に、盛土が途切れ、土塁がわずかに外側に折れ曲がる場所があり、搦手と考えられた。ここにも虎口と同じく、屈曲しながら西に延びる通路が想定される。

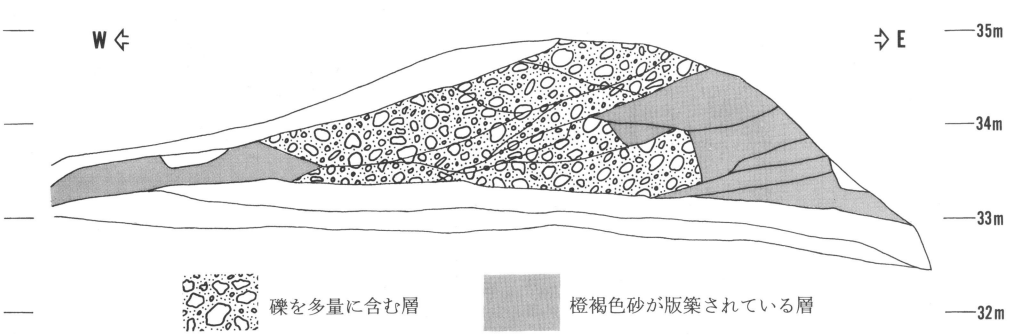
土　塁　土塁は東側の部分がもっとも残りがよく、南側では下半部が、西側では基部がかろうじて残存しているだけである。土塁の基本的な築造方法は、外側にあたる部分に地山の土である橙褐色砂を版築で突き固めて、その内側に岩盤を削平した礫を多量に混ぜた土を盛っていくもので、この手順を何回か繰り返して大型のものを造っている。東側の土塁は２ｍほどの高さまでこの方法で積まれている。

建　物　主郭内においては、１×３間の掘立柱建物が検出されたのみで、その他の建物は確認されていない。この建物は、南西隅の柱が岩盤をくり抜いて掘削されており、主郭内に露出する多くの岩盤部分に柱を乗せた建物があった場合には、認定が不可能となる。ただ、大きく掘削されたものは確認できなかったので、大規模な建物の存在は考えにくいであろう。

曲　輪　西側の急斜面部分には階段状の４段の平坦面があり、曲輪であると考えられる。このうち最上位の曲輪は、主郭に付属するような形で造られており、斜面肩に沿って柵列が並ぶ。また、虎口の南側で、突出する東側土塁の西部分や、東側土塁の東部分も曲輪として機能していた可能性がある。

火葬施設　東側の土塁の南端にあたる斜面肩に、岩盤をくり抜いて造られた火葬施設が検出された。この火葬施設は、隅丸方形の土坑の小口側に通風孔が附くもので、壁面が被熱している。熱残留磁気による年代測定では、12世紀代のものであるという結果が出されている。

近世遺構　近世の遺構としては、墓域と居住域がある。墓域は、虎口部分と搦手部分の段差を利用して造られており、調査直前まで墓域としての機能を果していた。墓の構造は、小型の壺に火葬骨を入れるものと、大型の甕に土葬するものがあり、いくつかのものは銭貨が副葬されていた。居住域は西側の斜面直下に営まれているもので、掘立柱建物や排水溝、廃棄土坑、漆喰で固めたトイレ遺構等が検出されている。これらの遺構の時期は、17世紀後半から19世紀にかけてのものである。



第３図　東側土塁断面図（１/80）



虎口（南から）



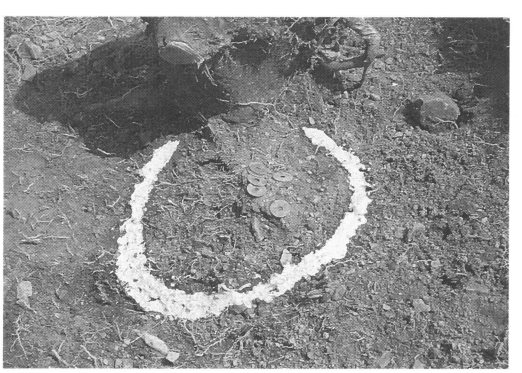
遺跡空撮（西から）



遺構西側（西から）



近 世 墓



銭貨出土状況



近 世 墓



トイレ遺構